

現代の日展作家たち  
— 日本の美

2019



鈴木竹柏「晨」2019年 改題 新 第6回日展

*NITTEN Artists Today: The Beauty of Japan*

現代の日展作家たち  
— 日本の美

2019

## はじめに

### 令和に明けゆく

今年五月に元号が「平成」から「令和」へと代わり、新たな時代を迎えました。

今年の日展の出品作としまして、現在「令和に明けゆく」という作品を制作しております。

日展は、明治四十年の文部省美術展覧会（文展）から数えて今年百十二年を迎えます。しかし、その時代時代によって変化成長を遂げてきました。私も作品制作にあたり、この歴史的な変化の中で新たな成長を遂げていかなければという思いで取り組んでおります。

自宅の庭を覆っていた大きな木々を、暗いので二年前に伐採したところ、明るく光が差し込み、その下にあった、長い間一度も咲いたことのない椿が、今年の春、はじめて真っ赤な花を、燃えるように一斉に咲かせました。それは驚きと感動で、自然の不思議さを感じました。椿の花の鮮明な赤い色は、温かみと強さをもって、新しい時代、日展の新たな時代をも予感させるものでした。なんとかこの赤を使い、赤に包まれるような作品にしたいと考えました。「令和」という時代の象徴に思えたのです。時代の変化は新しい想像力を生み、進化させていきます。

また、来年二〇二〇年はオリンピックの年であり、海外からも多くの人々が日本へいらつしゃいます。日本の文化を紹介する「日本博」が開かれ、スポーツだけでなく日本の文化芸術を世界へ紹介する機会も訪れます。

日展は常に高い次元を目指す作家集団として切磋琢磨し、より優れた日本の美術作品を、国内だけでなく世界へ発表していく視点で取り組んでまいりたいと思っております。ぜひ、多くの皆様にご高覧いただきご高評をいただけます。作家一同、これからも新たな時代に新たな希望を見出す優れた作品を生み出すよう、全力で努力してまいります。今後もより一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

公益社団法人日展 理事長

奥田小由女



日展の顧問・理事・監事紹介

4

日本画家ひとすじの道。百歳の挑戦

鈴木竹柏

16

心の目で見つめて描く永遠の女神

中山忠彦

20

木彫で生命感あふれる表現を

橋本堅太郎

24

イスラムと欧州のフィールドワークをもとに日本の藍を生かす

中井貞次

28

現代性を加味した大胆なかなの世界

黒田賢一

32

日本画の絵具の記憶と大いなる自然に包まれて

山田まほ

36

まっすぐに突き進む人物、ボクサーを描く

金築秀俊

40

彫刻で写実と抽象表現の新たな融合をめざす

横山丈樹

44

イメージ通りの形を作り上げるために

曾根洋司

48

書で自分自身を表現する

植松龍祥

52

日展開催概要と会期中のイベント

56





日本画 理事  
むらい まさゆき  
村居 正之

1947年、京都府生まれ。池田遙邨に師事。1968年、画塾・青塔社へ入会。1971年、第3回日展初入選。1984年、第7回日展「赤い陸橋」により特選受賞。1990年、第22回日展「サンマルタン運河」により特選受賞。2018年、改組 新 第5回日展「暮れゆく時」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展理事、大阪芸術大学教授。紺綬褒章受章。



「暮れゆく時」改組新第5回日展

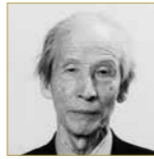


日本画 理事  
ふくだ せんけい  
福田 千恵

1946年、東京都生まれ。佐藤太清に師事。1969年、武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。同年、改組第1回日展初入選。1981年、第13回日展「紫陽花とテレサ」により特選受賞。1984年、第16回日展「単衣の女」により特選受賞。1996年、第28回日展「刀匠」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「ながい夜」により文部大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「ピアニスト」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



「はづき・盆」改組新第5回日展



日本画 顧問  
すずき ちくはく  
鈴木 竹柏

1918年、神奈川県生まれ。中村岳麓に師事。1936年、逗子開成中学校卒業。1943年、第6回新文展初入選。1956年、第12回日展「暮色」により特選・白寿賞受賞。1958年、第1回日展「山」により特選・白寿賞受賞。1962年、第5回日展「干潮」により菊華賞受賞。1981年、第13回日展「丘」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「気」により日本芸術院賞受賞。1994年、勲三等瑞宝章受章。1995年、日展事務局長。1997年、日展理事長。2007年、文化功労者。2009年、日展会長。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「黄雲」改組新第5回日展



日本画 理事  
わたなべ のぶよし  
渡辺 信喜

1941年、京都府生まれ。山口華楊に師事。1964年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)日本画科卒業。同年、第7回日展初入選。1971年、第3回日展「林檎」により特選受賞。1984年、第16回日展「林檎」により特選受賞。2015年、改組 新 第2回日展「夏草」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、京都精華大学名誉教授。



「荷風」改組新第5回日展



日本画 理事  
やまざき たかお  
山崎 隆夫

1940年、新潟県生まれ。下保昭に師事。1967年、京都教育大学特修美術日本画専攻科卒業。1965年、第8回日展初入選。1972年、第4回日展「森」により特選受賞。1973年、第5回日展「トマト」により無鑑査・特選受賞。1992年、第24回日展「海游」により日展会員賞受賞。2008年、第40回日展「沼宴」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「海煌」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



「何処へ」改組新第5回日展



日本画 副理事長 事務局長  
つちや れいち  
土屋 禮一

1946年、岐阜県生まれ。加藤東一に師事。1967年、武蔵野美術大学実技専修科日本画卒業。同年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「水たまり」により特選・白寿賞受賞。1976年、第8回日展「暮れて行く」により特選受賞。1985年、第17回日展「隠岐」により日展会員賞受賞。2005年、第37回日展「椿樹」により文部科学大臣賞受賞。2007年、第38回日展出品作「軍鶏」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長事務局長、日本芸術院会員、金沢美術工芸大学名誉教授。



「光の景 海亀」改組新第5回日展

日展の顧問・理事・監事紹介

2019年8月20日現在



洋画 理事  
ゆ や ま と し ひ さ  
**湯山 俊久**

1955年、静岡県生まれ。坪内正、伊藤清永、中山忠彦に師事。1979年、多摩美術大学油画科卒業。1983年、第15回日展初入選。1990年、第22回日展「悠想」により特選受賞。1998年、第30回日展「想春」により特選受賞。2004年、第36回日展「爽秋」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「L'allure(ラ リュール)」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第3回日展出品作「l'Aube(夜明け)」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。

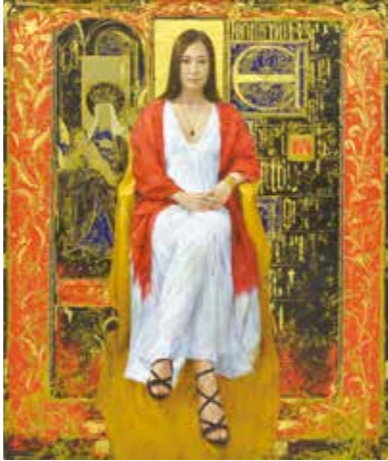


「而今（にこん）」改組新第5回日展



洋画 副理事長  
ふ じ も り か ね あ き  
**藤森 兼明**

1935年、富山県生まれ。高光一也に師事。1958年、金沢美術工芸大学油絵科卒業。1956年、第12回日展初入選。1980年、第12回日展「画室にて」により特選受賞。1984年、第16回日展「僧院の午後」により特選受賞。2001年、第33回日展「アドレクションパンタナサ」により日展会員賞受賞。2004年、第36回日展「アドレクション・デミトリオス」により内閣総理大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「アドレクションサンビターレ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員。



「星のマンسكريプトへのオマージュ」改組新第5回日展



洋画 理事  
さ と う て つ  
**佐藤 哲**

1944年、大分県生まれ。江藤哲に師事。1966年、大分大学学芸学部美術科卒業。1975年、第7回日展初入選。1982年、第14回日展「紫陽花の頃」により特選受賞。1993年、第25回日展「黒衣」により特選受賞。2009年、第41回日展「ひととき」により文部科学大臣賞受賞。2013年、第44回日展出品作「夏の終りに」により日本芸院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、東光会理事長。



「冬の一隅」改組新第5回日展



洋画 顧問  
て ら さ か た だ お  
**寺坂 公雄**

1933年、広島県生まれ。1956年、愛媛大学教育学部美術科卒業。1954年、第10回日展初入選。1962年、第5回日展「カニのある静物」により特選受賞。1986年、第18回日展「レリーフのある棚」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展「デルフォイへの道」により文部科学大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「アクロポリスへの道」により日本芸術院賞受賞。2009年、日展事務局長。2013年、日展理事長。現在、日展顧問、日本芸術院会員、光風会理事長、山梨大学名誉教授。



「ハープスタンドの秋」改組新第5回日展



彫刻 顧問  
な か む ら し ん や  
**中村 晋也**

1926年、三重県生まれ。東京高等師範学校卒業。1950年、第6回日展初入選。1967年、第10回日展「華の譜」により特選受賞。1968年、第11回日展「想華の詞」により無鑑査・特選受賞。1969年、改組第1回日展「宴の華」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「星のいのり」により日展会員賞受賞。1984年、第16回日展「焦躁の旅路」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「朝の祈り」により日本芸術院賞受賞。1996年、中村晋也美術館を設立。1999年、勲三等旭日中綬章受章。2002年、文化功労者。2007年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、鹿児島大学名誉教授、筑波大学名誉博士。



「日潮忠國公」改組新第5回日展



彫刻 顧問  
か わ さ き ひ ろ て る  
**川崎 普照**

1931年、東京都生まれ。斎藤素巖、平野敬吉、進藤武松に師事。1961年、第4回日展初入選。1964年、第7回日展「暖流」により特選受賞。1993年、第25回日展「未来への讃歌」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「大地」により日本芸術院賞受賞。2007年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「朝の光」改組新第5回日展



洋画 理事  
ね ぎ し ゆ う じ  
**根岸 右司**

1938年、埼玉県生まれ。渡邊武夫に師事。1961年、埼玉大学教育学部美術科卒業。同年、第4回日展初入選。1987年、第19回日展「鉱山寥乎」により特選受賞。1992年、第24回日展「雪の選炭工場」により特選受賞。2015年、改組 新 第2回日展「北海の岬」により内閣総理大臣賞受賞。2017年、改組 新 第3回日展出品作「古潭風声」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



「二月の岬」改組新第5回日展



洋画 理事  
な か や ま た だ ひ こ  
**中山 忠彦**

1935年、福岡県生まれ。伊藤清永に師事。1954年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「椅子に倚る」により特選受賞。1981年、第13回日展「縞衣」により特選受賞。1990年、第22回日展「青衣」により日展会員賞受賞。1996年、第28回日展「華粧」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「黒扇」により日本芸術院賞受賞。2001年、日展事務局長。2009年、日展理事長。現在、日展理事、日本芸術院会員、白日会会長。



「縞衣立像」改組新第5回日展



彫刻 理事  
やまだ ともひこ  
**山田 朝彦**

1943年、広島県生まれ。1966年、明治大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1987年、第19回日展「雄」により特選受賞。1990年、第22回日展「若人」により特選受賞。2012年、第44回日展「こもれび」により文部科学大臣賞受賞。2016年、改組 新 第2回日展出品作「朝の響き」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



「清秋」改組新第5回日展



彫刻 理事  
みやせ とみゆき  
**宮瀬 富之**

1941年、京都府生まれ。松田尚之に師事。1968年、金沢美術工芸大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1973年、第5回日展「風のよそおい」により特選受賞。1974年、第6回日展「風の中を」により無鑑査・特選受賞。2005年、第37回日展「はんなりと石庭に」により内閣総理大臣賞受賞。2009年、第40回日展出品作「源氏物語絵巻に想う」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大阪成蹊短期大学名誉教授。



「101%のプライド 村田諒太」改組新第5回日展



彫刻 顧問  
ひる た じろう  
**蛭田 二郎**

1933年、茨城県生まれ。小森邦夫に師事。1958年、茨城大学教育学部卒業。1965年、第8回日展初入選。1966年、第9回日展「ひとり」により特選受賞。1967年、第10回日展「女」により特選受賞。1968年、第11回日展「女'68」により菊華賞受賞。1996年、第28回日展「告知」により文部大臣賞受賞。2002年、第33回日展出品作「告知-2001-」により日本芸術院賞受賞。2016年、北茨城市蛭田二郎彫刻ギャラリー開設。2018年旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、岡山大学名誉教授、倉敷芸術科学大学名誉教授。



「永日抄2018」改組新第5回日展



彫刻 顧問  
はしもと けんたろう  
**橋本 堅太郎**

1930年、東京都生まれ。平櫛田中、澤田政廣、圓鐔勝三に師事。1953年、東京藝術大学彫刻科卒業。1954年、第10回日展初入選。1966年、第9回日展「弧」により特選受賞。1970年、第2回日展「薫風」により特選受賞。1992年、第24回日展「清冽」により文部大臣賞受賞。1996年、第27回日展出品作「竹園生」により日本芸術院賞受賞。1999年、日展事務局長。2000年、日展理事長。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員、東京学芸大学名誉教授。



「晩秋」改組新第5回日展



工芸美術 顧問  
いとう ひろし  
**伊藤 裕司**

1930年、京都府生まれ。山崎覚太郎に師事。1953年、京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸コース漆芸科卒業。同年、第9回日展初入選。1966年、第9回日展「刻象“大地”その内なるもの」により特選・北斗賞受賞。1968年、第11回日展「燦光」により特選・北斗賞受賞。1983年、第15回日展「収穫」により日展会員賞受賞。2004年、第35回日展出品作「スサノオ聚抄」により日本芸術院賞受賞。2018年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「有馬皇子」改組新第5回日展



彫刻 理事  
やまもと しんすけ  
**山本 眞輔**

1939年、愛知県生まれ。1963年、東京教育大学(現・筑波大学)教育学専攻科卒業。1962年、第5回日展初入選。1972年、第4回日展「生きがい」により特選受賞。1980年、第12回日展「ひたむき」により特選受賞。1992年、第24回日展「いい日」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「森からの声」により内閣総理大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「生生流転」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、名古屋市立大学名誉教授。



「心の旅―光の舞―」改組新第5回日展



彫刻 理事  
のうじま せいじ  
**能島 征二**

1941年、東京都生まれ。小森邦夫に師事。1964年、茨城大学教育学部美術科卒業。1962年、第5回日展初入選。1969年、改組第1回日展「窮」により特選受賞。1971年、第3回日展「省」により特選受賞。1990年、第22回日展「五月の女」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「悠久の時」により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「慈愛―こもれび」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



「愛―平成讃歌―」改組新第5回日展



彫刻 副理事長  
かん べ みねお  
**神戸 峰男**

1944年、岐阜県生まれ。清水多嘉示、木下繁に師事。1967年、武蔵野美術大学造形学部卒業。1968年、第11回日展初入選。1976年、第8回日展「裸婦」により特選受賞。1978年、第10回日展「裸婦」により特選受賞。2006年、第38回日展「長風」により文部科学大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「朝」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、日本彫刻会理事長、名古屋芸術大学名誉教授。



「忍」改組新第5回日展



工芸美術 理事

たけごし としあき

武腰 敏昭

1940年、石川県生まれ。金沢美術工芸大学卒業。1963年、第6回日展初入選。1980年、第12回日展「容」により特選受賞。1986年、第18回日展「蒼い花器」により特選受賞。2001年、第33回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2010年、第41回日展出品作「湖畔・彩釉花器」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、金沢学院大学名誉教授。



「無鉛釉上絵染付『朝まだき』」改組新第5回日展



工芸美術 理事長

おくだ さゆめ

奥田 小由女

1936年、大阪府生まれ。1967年、第10回日展初入選。1972年、第4回日展「或るページ」により特選受賞。1974年、第6回日展「風」により特選受賞。1988年、第20回日展「海の詩」により文部大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作「炎心」により日本芸術院賞受賞。2006年、奥田元宋・小由女美術館開館。2008年、文化功労者。2013年、日展事務局長。2014年、日展理事長。現在、日展理事長、日本芸術院会員。



「海から天空へ」改組新第5回日展



工芸美術 顧問

おおひ としろう

大樋 年朗

1927年、石川県生まれ。1949年、東京美術学校(現・東京藝術大学)工芸科卒業。1950年、第6回日展初入選。1956年、第12回日展「『風寒し』青釉花器」により北斗賞受賞。1957年、第13回日展「『鶏』緑釉壺」により特選・北斗賞受賞。1961年、第4回日展「釉彩『魚紋』花器」により特選・北斗賞受賞。1982年、第14回日展「『歩いた道』花器」により文部大臣賞受賞。1985年、第16回日展出品作「『峙つ』花三島飾壺」により日本芸術院賞受賞。2004年、文化功労者。2008年、金沢学院大学副学長。2011年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、現代工芸美術家協会理事長。



「犬ノ一声勝虎」改組新第5回日展



工芸美術 顧問

いまい まさゆき

今井 政之

1930年、大阪府生まれ。楠村彌式に師事。1957年、広島県立竹原工業学校金属工芸科卒業。1953年、第9回日展初入選。1959年、第2回日展「焼ペ『盤』」により特選・北斗賞受賞。1963年、第6回日展「『泥彩』壺」により特選・北斗賞受賞。1998年、「赫窯 雙蟹」により日本芸術院賞受賞。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。2018年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「紫暮の渚壺」改組新第5回日展



工芸美術 理事

み たむら ありすみ

三田村 有純

1949年、東京都生まれ。祖父の三田村自芳、父の三田村秀芳、高橋節郎、田口善国に師事。1973年、東京学芸大学教育学部美術科(工芸専攻)卒業。同年、第5回日展初入選。1975年、東京藝術大学大学院美術研究科(漆芸専攻)修了。1985年、第17回日展「ピラミス・遙か天空に」により特選受賞。1988年、第20回日展「ピラミス・嵩峻」により特選受賞。2014年、改組 新 第1回日展「炎立つ」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展「月の光 その先に」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第3回日展出品作「月の光 その先に」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、東京藝術大学名誉教授。



「あま・つち・天・地 Heaven Earth」改組新第5回日展



工芸美術 理事

はるやま ふみのり

春山 文典

1945年、長野県生まれ。蓮田修吾郎に師事。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1977年、第9回日展初入選。1979年、第11回日展「四角柱イン・セクション」により特選受賞。1984年、第16回日展「無限標」により特選受賞。2000年、第32回日展「風の門」により文部大臣賞受賞。2004年、横浜美術短期大学(現・横浜美術大学)学長。2016年、改組 新 第2回日展出品作「宙の河」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、横浜美術大学名誉教授。



「キュービック 宙・華」改組新第5回日展



工芸美術 顧問

もりの たいめい

森野 泰明

1934年、京都府生まれ。1958年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)卒業。1960年、同大学専攻科修了。1957年、第13回日展初入選。1960年、第3回日展「青釉花器」により特選・北斗賞受賞。1966年、第9回日展「花器『藍』」により特選・北斗賞受賞。2007年、第38回日展出品作「扁壺『大地』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「扁壺『赫鋳の居』」改組新第5回日展



工芸美術 顧問

なかい ていじ

中井 貞次

1932年、京都府生まれ。1954年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)工芸科卒業。1956年、同大学専攻科修了。1953年、第9回日展初入選。1969年、改組第1回日展「集積」により特選・北斗賞受賞。1977年、第9回日展「間の實在」により特選受賞。1990年、第22回日展「巨木積雪」により文部大臣賞受賞。1993年、第23回日展出品作「原生雨林」により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。

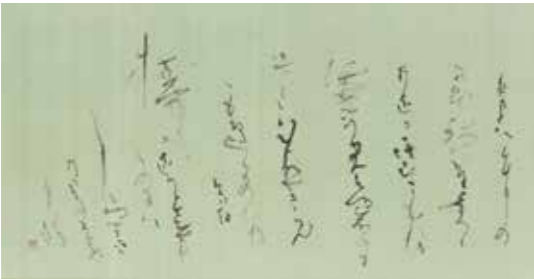


「旅遙か」改組新第5回日展



書 副理事長  
い しげ けいどう  
**井茂 圭洞**

1936年、兵庫県生まれ。深山龍洞に師事。1961年、京都学芸大学（現・京都教育大学）美術科書道卒業。同年、第4回日展初入選。1977年、第9回日展「梅」により特選受賞。1979年、第11回日展「富士山」により特選受賞。1993年、第25回日展「無常」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展出品作「清流」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第33回日展出品作「清流」により日本芸術院賞受賞。2018年、文化功労者。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、京都教育大学名誉教授。



「望郷」改組新第5回日展



書 理事  
あ ら い こうふう  
**新井 光風**

1937年、東京都生まれ。西川寧に師事。1966年、第9回日展初入選。1972年、第4回日展「九穀斯豊」により特選受賞。1978年、第10回日展「熱鐵」により特選受賞。1994年、第26回日展「雲龍風虎」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「盛稲梁」により文部大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「明且鮮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大東文化大学名誉教授。



「参和」改組新第5回日展



工芸美術 監事  
な み き つねのぶ  
**並木 恒延**

1949年、東京都生まれ。高橋節郎に師事。1973年、東京藝術大学工芸科卒業。1977年、東京藝術大学大学院美術研究科（漆芸専攻）修了。同年、第9回日展初入選。1987年、第19回日展「水の香」により特選受賞。1991年、第23回日展「時の流れに」により特選受賞。2006年、第38回日展「潮の紋」により文部科学大臣賞受賞。2019年、改組 新 第1回日展出品作「月出ずる」により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事。



「雨の風景」改組新第5回日展



工芸美術 理事  
よ し か はた お  
**吉賀 將夫**

1943年、山口県生まれ。1969年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1975年、第7回日展初入選。1983年、第15回日展「夜明け」により特選受賞。1985年、第17回日展「曜」により特選受賞。1996年、第28回日展「萩釉広口陶壺『ある光景の印象』」により文部大臣賞受賞。2000年、第31回日展出品作「萩釉広口陶壺『曜'99・海』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、山口大学名誉教授。



「萩釉陶壺『跡・2018』」改組新第5回日展



書 理事  
た か き せいりゅう  
**高木 聖雨**

1949年、岡山県生まれ。青山杉雨、成瀬映山に師事。1973年、大東文化大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1989年、第21回日展「天馬」により特選受賞。1993年、第25回日展「建始」により特選受賞。2006年、第38回日展「協穆」により日展会員賞受賞。2015年、改組 新 第2回日展「駿歩」により文部科学大臣賞受賞。2017年、改組 新 第3回日展出品作「協戮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大東文化大学教授、謙慎書道会理事長、公益財団法人全国書美術振興会理事長。



「鎔世」改組新第5回日展



書 理事  
くろ だ けんいち  
**黒田 賢一**

1947年、兵庫県生まれ。西谷卯木に師事。1969年、改組第1回日展初入選。1986年、第18回日展「山里」により特選受賞。1990年、第22回日展「ふじの雪」により特選受賞。2003年、第35回日展「深雪」により日展会員賞受賞。2009年、第41回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「小倉山」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本書芸院理事長。



「夕雪」改組新第5回日展



書 顧問  
ひ び の こうほう  
**日比野 光鳳**

1928年、京都府生まれ。父の日比野五鳳に師事。同志社大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1975年、第7回日展「春」により特選受賞。1978年、第10回日展「春」により特選受賞。1987年、第19回日展「天の海」により日展会員賞受賞。1997年、第29回日展「三日月」により内閣総理大臣賞受賞。1999年、第30回日展出品作「花」により日本芸術院賞受賞。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「承らえて」改組新第5回日展



書 顧問  
お ざ き ゆうほう  
**尾崎 邑鵬**

1924年、京都府生まれ。廣津雲仙、辻本史邑に師事。1954年、第10回日展初入選。1963年、第6回日展「陸游の詩」により特選・苞竹賞受賞。1970年、第2回日展「高青邱詩 送陳少府赴嘉定」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「竹窓」により日展会員賞受賞。1986年、第18回日展「高青邱詩」により文部大臣賞受賞。1993年、第24回日展出品作「杜少陵詩」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。



「四輪露々」改組新第5回日展

日展作家は語る

芸術とは何か  
創作とは何か



書 理事  
ほし こうどう  
星 弘道

1944年、栃木県生まれ。浅香鉄心に師事。1967年、立正大学卒業。1975年、第7回日展初入選。1990年、第22回日展「蘇東坡詩」により特選受賞。1992年、第24回日展「曾鞏詩」により特選受賞。2007年、第39回日展「李濂詩」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「小学之一文」により文部科学大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「李頎詩 贈張旭」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。

「墨妙筆精」改組新第5回日展



書 監事  
つちはし やす こ  
土橋 靖子

1956年、千葉県生まれ。日比野五鳳、日比野光鳳に師事。1979年、東京学芸大学書道科卒業。1980年、東京学芸大学専攻科（書道）修了。同年、第12回日展初入選。1992年、第24回日展「雪」により特選受賞。1998年、第30回日展「夕されば」により特選受賞。2008年、第40回日展「良寛春秋」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展出品作「墨染」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第4回日展出品作「かつしかの里」により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事。

「蟋蟀の声」改組新第5回日展



日本画

# 鈴木竹柏

日本画家  
日展顧問



葉山の住宅街から続く急勾配の坂を一気に登ると、紫陽花の花が今を盛りに咲き誇っている。生い茂る緑のなか、丘の一番上にあるのが、鈴木竹柏さんのアトリエである。窓の外には生き生きとした葉が生命力豊かに広がっている。このアトリエで三十年、今年百歳を迎えた鈴木さんは、今朝も制作にとりかかっていた。鈴木さんは逗子に生まれ。逗子開成中学校を卒業。美高に進もうと思っていたところ、縁あって、同市内の日本画家、中村岳陵に師事。十年余り内弟子生活を送り、師と起居を共にした。院展や新文展などに出品。葉山の自然をテーマに美しい色合いと濃淡で、空気感のある幽玄の美と重厚な趣を表現している。現代日本画界の最高峰に位置する画家である。

## Profile

Chikuhaku Suzuki

1918年、神奈川県生まれ。中村岳陵に師事。1936年、逗子開成中学校卒業。1943年、第6回新文展初入選。1956年、第12回日展「暮色」により特選・白寿賞受賞。1958年、第1回日展「山」により特選・白寿賞受賞。1962年、第5回日展「干潮」により菊華賞受賞。1981年、第13回日展「丘」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「気」により日本芸術院賞受賞。1994年、勲三等瑞宝章受章。1995年、日展事務局長。1997年、日展理事長。2007年、文化功労者。2009年、日展会長。現在、日展顧問、日本芸術院会員。

## 百歳の挑戦。絵を描くこと 努力を忘れないこと

「絵を描いていることで生きている」という言葉が印象的であった。朝は制作にかかると。昼も少し描く。昨日、一昨日も描いた。少しずつ進めて完成へもっていく。

先日、ちよつところんだこともあったがリハビリもあって治った。必死に歩きたいという気持ちが強く、前よりも歩くようになったという。良く努力をされる。それが

治る力になる。リハビリの先生からは「僕たちはこの年代の人たちのように長生きできない」と言われた。子どもの頃から自然豊かな葉山に住んで、学校に行くのも山を越えていかなければならず、いつでもたくさん歩いてきたのだ。

鈴木竹柏さんは何よりも自然が好きである。生まれ育った葉山の自然。山を越え通った道。「この辺の景色はいい」と語る。生まれたところが原点で、この高台に越えてきて三十年。海も見え、四季も味わえる。子供の頃は結核で体が弱かったが、誰よ

りも長生きされている。画家として「いつまでも描きたい」ということと「いつも努力する」こと、この二つが百歳の挑戦を成し遂げる大きな要因だという。絵を描くことに執着、集中されているのだ。

## 子ども時代に 矢車草の絵をほめられて

一九一八年（大正七年）、神奈川県逗子町久木柏原村に、兄三人、姉四人の八人兄弟の末っ子として生まれた。小さい頃から絵



を描くのが好きで、学校に入って描いた矢車草の絵を美術の先生にほめられたのがとてもうれしく、絵の道に進むきっかけともなった。最初は鎌倉彫をしていたので彫刻の道も考えたが、ご縁があって中村岳陵先生の所に行くことになった。当時は体が弱く、体力のいる彫刻は無理だとも思ったという。中村先生の所も戦争中で人手がなく、絵の修業の他に炊事、掃除も行った。真面目に何でもする癖がついた。家はすぐ近所だったが、絶対に帰ることを許してもらえなかった。かといって絵を描かせてはもらえないわけでもない。ほとんど雑用をこなす毎日。「他の人には勧められません」と語るが、我慢を苦としなかった。

## 天性の色彩感覚。 中村岳陵先生のもので

そうした厳しい修業のなかで、何に対しても鋭い観察眼を持っていた。時間を見つけては裏庭に咲いていた花を描いたことがある。若々しく色がきれいで、花のみずみずしさをみごとに表現していた。「絶対誰にも教えてもらわなかった」と言う。若い頃からある種光るものがあって、岳陵先生も展覧会の際はいつもほめてくださった。他の人には厳しいことを言っても竹柏さんにはそういうことはなかったという。そしてさらに頑張ったのだ。



「山」 2009年 第41回日展

岳陵先生の弟子となって朝から晩まで共にしたが、今までの生活とは違い、自由になる時間もないので、先生のやり方が何かも身につくという良さもある。どうやって生きていくかも、みな師の真似をするのだ。ただその影響力は強く、やがて抜けようと思っても相当な時間がかかることになった。

十九歳で院展に初入選。二十五歳で新文展に初入選を果たした。

「初めの頃は、岳陵先生が出されるので院展と日展両方に出していました」。それぞれ色があって、日展の伸びやかさが良かったという。日展では風景を描いてきた。

夫人との出会いも岳陵先生の家であった。夫人の兄が日本画の勉強をされていて岳陵先生の所に通っていた。その時、病気で休んでいたお手伝いの人の代わりに手伝っていたのが現夫人だった。岳陵先生が間をとりもってくださり、めでたく結婚したのは三十一歳のときである。しかしその後、苦労があったという。夫人は末っ子で伸び



今、年に十人以上描いている。膠を溶いているとだんだん描く気になって、集中されるという。いつも三、四点ずつ並行して描いている。いつでも座って始められるようにアトリエは体制が整っているのだ。

かつて国内外でスケッチをした風景を念頭に、最近は黄金色の雲がたなびく様子や金地の背景に墨の濃淡を生かした山岳風景など、幽玄の美を追求している。

頭の中にインスピレーションが湧いてそれを描く。「今は写生することはなく、これをやったらどうかと、自分で軽くスケッチしてから本画に描きます」。百年の間、頭に蓄積してきたもので描く。昔のスケッチを見たりもしているが、画室にひとり籠もって、日々制作を重ねる。景色を主に描くが自分の好きな形があって、どんな空の色にするか、木の色にするか、いろいろ試す。何もないところから少しずつ形に

### 年間十枚以上を描く 百年心に刻んだ風景

を描いた。そしてやはり自分の個性を出したいというのがあった。こうして自由に自分の画風が確立し生活が軌道に乗ってきた。画商さんも大事にしてくださいいろいろなご縁ができたという。時代が後押ししたこともあり、生涯、画家のみで歩いてきたのだ。



【展】 2019年 改組 新 第6回日展

露してくださった。

### 画家ひとすじに生きて

竹柏さんは画家ひとすじの道を歩いてこられた。そこには中村岳陵先生の教えを堅く守ってきたことがある。「人に教えてはいけない」「売り絵を描くと絵が荒れる、品が悪くなる」「お金を考えてはいけない。絵を描くのは食べるためではない」

売り絵ばかり描いていたら、その切り替えが難しい。純粹に作品作りに没頭した。岳陵先生のすぐ側にいたので、先生の教えのまま行動する毎日。先生のお宅は逗子駅の線路の向こう側の山の麓にあり、多くの人が出入りする大きな家で、甲冑や能面など骨董品がたくさんあった。

また夫人の兄上三人のうち、二人は洋画家になったという芸術一家であった。六歳下で今年九十四歳になられる夫人はいろいろな絵の批評もされ、ずっと竹柏さんを支えてこられた。

「書生時代は忙しくて外出できず、よく庭の植物を写生しました。先生は真面目で細かな描写をされる方。描かれるのをそばで見えていましたが、見過ぎてしまい、その影響から抜け出るのが大変でした。最初は先生のされるように細かい木の枝をずっと描いていたのです」と当時を振り返る。

先生が亡くなられてから、それが抜ける

なっていく。最後にきちんと決まる。百年の積み重ねを生かし、百歳の今も画才は衰えることなく、ますます冴え渡っているのだ。

振り返れば、理事長のころは大変な時代だった。七十九歳で就任した。巡回展が多かったで地方へあちこち出かけ、南は沖縄まででかけた。帰りにどこかでスケッチしたりしたこともあった。また行幸啓の折にはご案内役を務めた。

高島屋さんから去年いただいたという大うちわが応接の壁に掛けられていた。竹柏さんが二、三十年前に描いた夏の富士山の作品である。久しぶりに対面した自分の作



「神苑」 2008年 第40回日展

までにどれだけ苦労したかわからないという。身についているので、本人も細かい描写の絵の方がいいように思うが、そう描くと先生の絵に似てしまう。それではだめだと気がついて、努力して徐々に消え、消えたところで自分もいいかなと思い始めた。おそらく先生が逗子に百歳まで生きていらしたら気にいるような絵を描かなければいけないので、先生の影響から抜け出すには何十年もかかったかもしれないと振り返る。

そうしたなか、高山辰雄先生に誘っていただき一采社などに参加し、研鑽を積んでいた。研究会に入れていただいたことが一番の励みになったという。認められたということが何よりもうれしく、多くの作品



品を前に、「若いっていいなあ。僕はもうこういうのは描けない」としみじみ喜ばれたという。

昔のように、夏の富士山を前にスケッチすることはかなわなかったかもしれない。しかし、今でしか描くことのできない百年の足跡ともいえる作品は、深く心の風景を描きだし、新たな画境を開いている。清々しい色合いの若い時代から、淡くくすんだ色合いと濃淡で表現された深い山々。画家の歩んできた道のり、衰えることのない画家としてのいのちが落ち着いた色合いの絵の中に深く静かに輝きを放ち、さらなる高みへと歩みを進めている。

洋画

# 中山忠彦

洋画家  
日展理事

五十年以上にわたり十九世紀のフランスの衣装を纏った優美な女性像に永遠の美を描いてこられた中山忠彦さん。昨年は千葉県立美術館でその画業を振り返り、衣装コレクションも含め紹介する大きな展覧会が開かれた。中山さんの作品の世界をそのままに、ゴブラン織りの大きなタペストリーが掛けられた、市川のアトリエを訪ねた。



## Profile

Tadahiko Nakayama

1935年、福岡県生まれ。伊藤清永に師事。1954年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「椅子に倚る」により特選受賞。1981年、第13回日展「縞衣」により特選受賞。1990年、第22回日展「青衣」により日展会員賞受賞。1996年、第28回日展「華粧」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「黒扇」により日本芸術院賞受賞。2001年、日展事務局長。2009年、日展理事長。現在、日展理事、日本芸術院会員、白日会会長。

## 疎開先の大分で終戦

穏やかな笑顔でゆったりとお話しされる中山忠彦さん。地元で開かれた展覧会には小学校五年生のファンの女の子が新聞記事を見て「先生にどうしても会いたい」と母親と訪ねてくれたのが一番の収穫だったと笑顔で語る。

九州は小倉生まれの中山氏の実家は運動用品店を営んでいたという。しかし、戦争の色が濃くなってくると、敵勢スポーツである野球をする人は減り福岡市の中で一つのだけの店舗にまとめられ、福岡に転居。二年後にはいよいよ戦火が激しくなり両親の郷里の大分県の中津に疎開をすることになった。

「中津には工場もなく、爆撃の対象でなかったのが全く無事でした。頭の上を通り越して北九州へ。ウオンウオンとB29は独特の音がするのです。見れば上空二万メートルくらいは見えるのです。光っていて今日も来ているなと思って見ていました」

終戦は五年生のときだったが、「僕らも一人前に軍国少年でした。子供心に日本が負けるなんて思っていなかったです。九州は本州と考えが違って、九州独立国になるうかと。負けて、九州が一丸となって戦争しようという考えもあったと聞いています。早く戦闘帽を被りたいとか、必須科目の剣道をやりたいなと思ってはいました。しかし敗戦と同時に教科書は全部墨で塗られていくわけです。子供だから教えられた通りに信じ込まされていました。その後改革で

新制中学・新制高校・大学となり、戦地から引き揚げてきた少尉や中尉が先生で来るわけです。元軍人ですからなかなか厳しかったです。そういう体験はしてきました」

その頃は絵を描くにも紙がない。「僕は三年で疎開をしたら、なぜかクラスの中で一番絵が上手いことになってしまった。福岡にはもつと上手い子がたくさんいたのです。そういう子には紙を特別に何枚かくれます。その代わりに軍艦や飛行機を描けとか。スケッチなんかもしたことはなく鉛筆くらいしかありませんでした。新制中学校の頃、やつと不透明水彩が出てきて描きました。ところが紙もろくなのがないし、写真の裏が白いので、そこに絵を描いていました」

五人兄弟の一番上で、絵を描いているのは親戚の中にも誰もいなかったという。

## 高校二年で大分県知事賞を受賞

高校時代は、当時日展に出品していた木版画の先生が版画の手ほどきはしてくれただが、デッサンの指導は全くなかった。「ただ美術部の卒業生で伊藤清永先生と美術学校で同期の山中清一郎さんの石膏デッサンが壁に飾ってあって、この数点の存在は今でも目に残っています。それを見よう見真似で、授業が終わったらすぐに美術部の部屋に行って描いていました。当時、まだ油絵具は持っていませんでした」

大分県は文人画家、田能村竹田の出身地であった。田能村竹田を偲ぶ美術祭には九州全域の小学校から高校までみな作品を応募した。中山さんは高校二年のとき大分県知事賞の荣誉に輝いた。「毎日新聞に写真入りで記事が出たのです。それを見て、親父も僕が絵描きになりたいという希望を聞いてくれました」

## 伊藤清永先生との運命的な出会い

同じ頃、日展の巡回展を小倉まで見に行った。そこで伊藤清永先生の「椅子に臥せる裸婦」に初めて出会う。「その魅力に強く索かれ、この先生に指導をして欲しい」と思ったという。ただ、当時はそれは夢だった。

その後、東京藝術大学を受けるために上京し、母の従兄弟の下宿に泊まることになる。従兄弟が家主に「絵描き志望の男が来るからちょっと試験の間泊めるから」と了解を得た折、その人が「では絵描きを紹介するよ」と、その人の名前を聞いて驚いた。何と伊藤清永先生その人だった。奇遇にも家主は伊藤先生のパトロンの一人だったのだ。

「そういう偶然の重なりがあつて、幸運だったです。それは本当に僕にとっては得がたい道筋だったのですけれど」。翌日には伊藤先生の所に同道してもらい「すぐに家に来てデッサンをしなさい」と言われ一週間ほどデッサンをした後、「やはり受験生がたくさんいるところがいいだろう」ということで伊藤先生の同級生、三輪孝さんがやっている阿佐ヶ谷洋画研究所で他の学生と一緒にデッサンを学んだ。その後、受験するが、「田舎の高校を出ただけですから当然落ちてしまいました。それから伊藤先生の所にときどきデッサンを見てもらいに行っていたが、ご自分のアトリエの敷地の中に伊藤絵画研究所が新たに作られたので「事務的なことを面倒を見てくれないうか」と言われる。「藝大に行っても学校の先生になるのがおちだぞ」ということで、伊藤先生もちょうど都合がよかったでしょう。すすめられて日展に出品し、その入選発表直前に親父が死んで、伊藤先生が『お





後進を育てていきたいと考え、二〇〇七年から蓼科で始められた画塾からは、広く活躍する若い画家が出てきている。始めたのにはきっかけがある。「スペインの女流ピアニスト、マリア・ジョアン・ピリスが

#### 蓼科の画塾

#### 「アカデミー中山イン蓼科」

何となくそれを口に出して言うには気恥ずかしいところがある。僕は日展の洋画は現在では偉大なるアマチュアリズム、そういう団体だとあるパーティーの乾杯のときに言ったことがあったのですが、皆さんにプロになれなくてもとにかくプロを目指して頑張ろうと。入選、特選ではなく、命を懸けてそれに突っ込んでいける、そういう根性のある人が欲しいです」



「織衣立像」 2018年 改組 新 第5回日展

スペインの片田舎で広い会場を借りて、友人のバイオリニストも呼んで、ピアニスト志望者たちを集め、自分で食事を作って面倒を見ながら教え、しかもバイオリンとの共演で教育をしている。そうした番組をテレビで見たのです。ああ、これはいい。こちらはただの絵描きですけれども、これをやりたいなと思っていたところ、蓼科の別荘のそばに百畳敷きのアトリエともうひと棟同じ百畳敷きで二十人くらい泊まれる台所食堂がついた宿泊施設があって、中を見たら理想的な建物だったのです。そこでモデルさんと呼んで勉強してもらおうとなりました。毎回五人くらいの親しい画家たちの講師陣で、その指導のもとに勉強をしています。今では若い人たちも年を重ね、卒業生も出ています」

#### 人間の目は心、感受性と表現力がない とリアリズムにならない

昨今の写実の画風について、コメントをいただいた。

「あまりにも写真を転写した作風に傾き過ぎています。基本的には人間の目は心ですから、それを基本にした感受性、表現力がないと形だけを写してリアリズムと称しても僕は決して信頼はしない。人が見て心に響くようなものがない限りは認めません。むしろ多少形に破たんがあっても、そこに

気持ちが入って核心に迫っていく、そういう造形力を持った人が出てくるかと思っていますね。やはり二つの眼できちんと見て感じてやつてもらいたい。併用するのはやむを得ない。髪の毛を一本一本描く技量には感心をするけれどもその見方には感心はしない。もっと大事なことがある筈ではないか。写真で描く一番の弱点は省略ができないことです。写真には全部写っていますからその判断力は無くなります。一番の危険性はそれだと思う。僕に言わせると写真が本当は嘘なんです。

白日会は日展洋画の中で特殊な位置を占めています。出来得ることなら白日会からの入選作、会員の作を一室にまとめて展示して写実の見本を提示したいくらいです。聖書コリント人への十二の手紙の中に『私達は見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは過ぎ去るものである』との聖句から、『見えるものを通して見えないものを描く』との理念を抽出し、会のイデーとしています。日展にこれを提示しても無理だとは思いますが、あくまで日展洋画の一端としての白日会と記しておきますが、日展もイデーを持たねばならないと、長い間の空白を残念に思っています」

奥様をモデルに、穏やかなまなざしで、心で見つめて描いてこられた中山さんの重みのある言葉であった。



伊藤絵画研究所に移り、中山さんは初出品初入选。十九歳のことである。「旧都美術館の一番最後の部屋に、ぎりぎり入りました。伊藤先生はとにかく『プロの絵描きになれ』と。プロの絵描きが美術団体のリーダーになっていかないと絵描きは育っていかない、という昔から確かな論法をもっていました。今にしてその言葉の意味がわか

#### 伊藤先生の教え 「プロの絵描きになれ」

前は俺の所で一緒に勉強しよう』という話になって四年足らずでしたが、ごやっかいになりました」



「華粧」 1996年 第28回日展 内閣総理大臣賞

ります。白日会はおかげ様でいろいろな団体の中ではプロの絵描きが一番多い。ところが半数は日展に出さない。僕としては日展で育ってきたわけですから、日展でいろいろなご縁をいただきながら今日がある。日展には地方巡回展がありますから、巡回展を通じて、私のように将来絵描きになりたい人の縁ができればいいと、自分の体験を通してそう思うわけです。巡回展にもちろん全部出品してきています」

初めのうちは伊藤先生が裸婦の絵描きだったことから、基本的に裸婦を描いていた。将来はコスチュームを描きたいと思っていたので、下地作りをしっかり学ぶという考えがあつてのことだった。結婚してからは奥様をモデルに、十九世紀フランスの衣装を纏った女性の美を描き続けることになる。中山さんの品格のある婦人像は瞬く間に評判を呼んで、みなが楽しみに日展に來られた。こんなエピソードがある。

何年めかに裸婦の絵を久しぶりに描いて日展に出したところ、中日新聞が「今年の日展のサブライズは中山の裸婦」と書いたという。その後も、家の庭に咲くミモザの花の早晩風景を描いて出品したところ、展覧会を見に来た人が一回りして中山さんの絵がないので「今年は休みか」と言われてしまったというほど、婦人像が定番となった。衣装にもこだわりがあり、十九世紀のフランスを中心にした衣装を描きたいと思い、

それが手に入る方法を見つけることになる。「百年前の骨董品で布も弱っているのですが衣装としても価値が高いウォルト、バキャン、シャネルなどのデザイナーのものが何点もあるわけです。そういうものはやはり素晴らしいです」。ドレスだけでなく、帽子や装身具などすべてのコレクションとしても有名である。絵の背景となる椅子や壁、装飾品も時代を合わせているのだ。

#### 命をかけて作品にかける プロをめざす団体に

日展の理事長を長年務めた中山さんの日展への思いは強い。「日展というのは本来アカデミズムの団体なのです。伊藤先生もよく「本当にアカデミックな仕事を日展の中でしたい」と言われていました。白日会では写実の問題というのが重要になってきます。日展はアカデミズムを標榜していながらアカデミズムに対する劣等感というか、



「黒扇」 1998年 第29回日展 日本芸術院賞

彫刻

# 橋本堅太郎

彫刻家  
日展顧問

橋本堅太郎さんのアトリエは荻窪の住宅街の一画にある。天井の高いアトリエは白い壁に焦げ茶の木を渡したモダンなデザイン。奈良の寺の漆喰の壁と柱の対照が気に入る。橋本さんはこちらで五十年にわたり、木を素材に、一ノミ一ノミ心を入れ、木彫による女性像など清らかで生命感に満ちた作品を制作し続けている。二〇〇〇年より日展の理事長に就任。八年の長きにわたり務めた。二〇一一年、美術界での功績をたたえられ文化功労者に選ばれている。



## Profile

Kentaro Hashimoto

1930年、東京都生まれ。平櫛田中、澤田政廣、圓鋳勝三に師事。1953年、東京藝術大学彫刻科卒業。1954年、第10回日展初入選。1966年、第9回日展「弧」により特選受賞。1970年、第2回日展「薫風」により特選受賞。1992年、第24回日展「清冽」により文部大臣賞受賞。1996年、第27回日展出品作「竹園生」により日本芸術院賞受賞。1999年、日展事務局長。2000年、日展理事長。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員、東京学芸大学名誉教授。

## 木彫家の家の長男に生まれて

橋本さんは彫刻家、橋本高昇の長男として一九三〇年、東京・滝野川に生まれた。両親は福島県二本松市の出身で、父親は動物彫刻家であった。二本松というのは富山の井波と並び欄間彫刻が盛んで、いま、欄間を彫れる人は遠い親戚に二、三軒しかないという。

三木多聞氏の父親のアトリエが東京・駒込にあった関係で、そのそばの地主の家の一画を改造して父親がアトリエとしていたが、機関車の煤煙がひどくなり、杉並区

現在の場所に住まいを移した。橋本さんが六歳の時である。「小さいときは親父のアトリエから飛んでくる木っ端を積み木代わりにして遊んだのです」。父の弟子たちにまじり、木の香りの中で育ち、自然と木彫の世界に慣れ親しんでいた。

## 戦争の真っ只中の中学時代と彫刻家への決意

中学校は現在の名門西高（府立十中）へ歩いて通った。当時西高は幼年学校と士官学校への入学率がトップの軍人の学校だった。気が進まなかったが、週に一度は軍事

と見るともうそばにいます。ところが機銃が正面しかならないので、とにかく小学校では真横に逃げることを教わりました」

久我山の十中の向こうにB29が落ちたので、見に行くと、おばあさんが「せがれのかたき」と鍬をふるった。そのアメリカ兵の悲鳴はいつも耳に残っている。「戦争はやるものでないと思ったはじめです」

玉音放送は勤労動員で働いていた下連雀の日本無線で聞いた。船舶用の電波探知機を一本ずつ試験する仕事だった。その日の帰りに「しばらく来なくてよい。連絡があるまで待機していなさい」と言われ、十中から連絡が来たのは一週間ほどしてからだった。

以後、学校教育は変わった。教科書は墨や線で塗りつぶされた。「軍事教官は手のひらを返したように学生にこべこべしていました。戦時中の軍事教官は怖いなんてものではなかったのです」。価値観が変わってしまった。

そうして、戦後、長男だった橋本さんを筆頭に男兄弟三人は、父親から「誰が家を継ぐのか」問われることになる。両親の苦労を見ていたので、みな断ったという。しかし、その後、父のノミを叩く背中が気になって、橋本さんは「やってみよう」と決意したという。

東京美術学校への最初の受験は中学四年

のときだった。当時予科があつて、中学四年から入れたのだ。しかしかなわず、西高に六年通い、新制大学の第一回に合格し、一九四九年東京藝術大学彫刻科に入学した。

## 東京藝大で平櫛田中先生による直彫りの薫陶

指導を受けたのは日本近代彫刻の巨匠、木彫家の平櫛田中先生であった。しかし待っていたのは自ら考え学ぶという、橋本さんにとって辛い日々だった。好きなものやらせてもらえないと思ったら、模刻で手本と同じ形に彫る毎日だった。しかも橋本さんが慣れ親しんだ星取りではなく、経験したことのない直彫りだった。星取りは粘土でつくった形を石膏で型どりし、そこに星と呼ばれる点を打ち、コンパスで木に写し取る技法。一方、木から直接形を作り出すのが直彫りで、自分の感覚だけが頼りである。星取りはお手本があり、星を取ればできていく、直彫りは一発しぞんじたら他でどうするかを考えなければいけない。田中先生は父と同じように職人から上がってきた人なので仕事がいへん早かった。田中先生に頼まれて、直彫りで狛犬を作ったこともあった。形を決めて自分の気持ちと原型を見ながら彫っていく。直彫りだといくらデッサンしても誤って彫ってしまうことがある。それを誤りでないように見える





「はじめての旅」 2016年



二〇〇七年に日展百年の年を迎えた。こうしたたいへんな節目に活躍されたのも、「高山辰雄先生や東山魁夷先生に目をかけていただけたのが良かった」と語る。

### 自分の世界を 強くもって取り組む

作品制作にあたっては、その時その年で世の中に対して芸術家はどうかあるべきかを考え、決めていく。モデルは好みの人に出会うまで諦めない。自宅に「子息のダンス・スタジオがある関係で、モダンダンスの世界の人と交流ができ、あるときからずっとモデルをお願いしている。

今後の若手に期待されることを伺った。「いま若いのに、この先生につけば上に行けるとか考える人がある。そうではなくて、俺はこの仕事をやっていきたいという人を



「流水」 2000年

「日展に行く」と言ったらばかにされたので見返してやろうと思いました」。平櫛先生が学生のうちに公募展に出されるのを好まねず、藝大を卒業した翌年に初出品。橋本さんは堂々、日展に初出品で初入選を果たした。

### 初めての落選を経て得たもの

しかし二度目は思いもかけぬことが起きた。落選。そのショックから自分を見失いそうになり、ひとり仏像や寺をめぐる旅に出ることになる。そこで出会った住職や大谷石職人のおじいさんから聞いた言葉に心打たれ、自分を見直し、本腰を入れて制作に取り組もうと誓ったという。以後、仏像制作との関わりも多い。

落選の翌年からは日展に連続入選し、六六年には特選を受賞。ここからが転機となった。

「今は自由に作っていますが、性格的に、考えて考えて制作しないと納得がいかない。今の若者はアイデアだけだから、技術も何もない。積み重ねがない」と警鐘を鳴らす。常に努力を重ねた。一門の内弟子は先生が推してくれることがあるが、藝大出身は内弟子ではなく厳しい世界だったが、それがかえって良かったと振り返る。負けず嫌いの橋本さんは無理を重ね、喘息を患いながらも息絶え絶えで作品制作に取り組んだ

こともある。

一九六四年に結婚。音楽の教師だった奥様との出会いはYWCAの野尻キャンプだった。その後ふたりのご子息をもうけたが、現在は彫刻家でジャズダンサー、シンガーソングライターとして活躍されている芸術一家である。

一九九四年に「竹園生」で日本芸術院賞を受賞した。竹の弓とふたりの女性を組み合わせた高さ二メートルを越す大作で、伸びやかなポーズが特徴的な氣品に満ちた作品である。「単に二つ彫るだけでなくどこから見ても美しく見えるように組み合わせるのはたいへんな仕事でした。その当時、木彫で二メートル五十からの群像を彫る人はほとんどいませんでしたから、すごい意気込みだったと思います」と若き日のことを振り返る。この作品によって橋本さんは木彫界の第一人者となり、同年日本芸術院会員となった。

さらに、二〇〇〇年からは八年間の長きにわたり日展理事長を務め、日本の芸術文化活動の先端で活躍された。重責であったが、地方に行く度に地元の若い作家と話すチャンスがあったのがうれしかったことだ。彫刻家の家に生まれたのでそれ以外の作家を知らなかったという橋本さんの元へ工芸や日本画などいろいろなジャンルの若い作家が訪れた。地方の実態を聞いて、理事長としての仕事に活かしていった。こうして、



「一魂」 2016年 改組 新 第3回日展

ときに、一度だけ脚立から落ちたことがあるが辛い事なきを得た。

幼い子どもの姿に思いを馳せる橋本さん。両親の出身である二本松にちなみ、幕末の二本松藩において戊辰戦争に出陣した十二歳から十七歳の少年兵部隊二本松少年隊の像を作ったこともある。「陣羽織の小さいのがお寺にあって、見ると涙が出ますが、それを着て戦ったわけです」。「会津攻めよか、仙台とよか、ここが思案の二本松」。会津白虎隊と並ぶ悲劇であった。

木彫一筋に進んで来られた橋本さん。お孫さんをモデルにされた「はじめての旅」、「ご子息をモデルにされた「一魂」、斬新な造形の「流水」など、詩情豊かに、また愛情と木の「ぬくもり」が感じられる作品は、日展会場のなかでも静かに深い光を放っている。

工芸  
美術

# 中井貞次

染織家  
日展顧問

二十代後半と四十代の二度にわたりイスラム圏とヨーロッパを二年間、車で計七万五千キロ走行し、肌で宗教と美術、生活を感じ、体験された中井さん。普通経験できないフィールドワークを通じて多くのことを学ばれ帰国。年月を経てイメージを熟成させ、染織作品に生かされている。来米米寿を迎える中井さんから、数々の興味深い経験談を京都のご自宅でご伺った。すべてをご紹介するには誌面が足りないが、そのエッセンスをご紹介します。



## Profile

Teiji Nakai

1932年、京都府生まれ。1954年、京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）工芸科卒業。1956年、同大学専攻科修了。1953年、第9回日展初入選。1969年、改組第1回日展「集積」により特選・北斗賞受賞。1977年、第9回日展「間の實在」により特選受賞。1990年、第22回日展「巨木積雪」により文部大臣賞受賞。1993年、第23回日展出品作「原生雨林」により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。

京都太秦に育って  
京都市立美術大学へ

「母は滋賀の石馬寺の寺娘でした。小学生の夏休み、寺に行くと、平安期の十一面観音が二体あって、住職の祖父が欄間を彫り出したりしていました」

戦争の激化にともない、銀行員の父親は徴用で、家族も大阪から京都の太秦に疎開することになった。太秦は広隆寺の国宝弥勒菩薩や秦河勝が養蚕業を普及したのが有名で、繊維に関係がある土地だった。

終戦もそこで迎えた。一九五〇年に新学制が施行され、京都美術専門学校が京都美大へ昇格したおりに兄が願書を出したことをきっかけに美大へ入学。クラスの半分は

美専からの編入組だった。戦後の混乱期で、とにかく欧米の美術に追いつけ追い越せの時代。工芸科に入り、染織、陶器、漆、図案の中から三回生で染織を専攻した。そこで出会ったのは蠟染が小合友之助、型絵染は人間国宝の稲垣稔次郎教授であった。小合先生はクラシック音楽にも深い造詣があり、音楽会や大徳寺の高僧の掛け軸の虫干しの時などお伴し薫陶を受けた。特に宗達に私淑し、すばらしい模写も描かれたが、院展の日本画から、新設された日展の工芸部門に移ったことから、四回生の時「とにかく日展に出してみないか」と言われ、初出品で初入選。それから六十五年間、出品を続けている。

専攻科修了後は図案専攻の研究助手となり、爾来四十一年間大学人として過ごした。

研究室ではブルノータウトに日本を紹介した上野伊三郎、ウィーン工房スタッフだったリッチ両教授の助手として両教授の定年まで務めた。工芸科には富本憲吉、近藤悠三、日本画科の小野竹喬、福田平八郎、徳岡神泉、上村松篁、西洋画科には須田国太郎、黒田重太郎の諸教授がいた。

在外研修員として  
日本の工芸の源泉イランへ一年

作家としての芽生え、一番大きな転換期となったのは、二十九歳から三十歳にかけて美大の在外研修員としてペルシャを旅したことだ。「正倉院の御物はペルシャのものが多く、それらがどのような風土で生み出されたか、どうしても直に見てみたかったのです」。



「縄文杉」 1997年 第29回日展

たのです」。危険が伴う旅に大学の反対も受けたが、担当教授は応援してくれた。富本先生の助手の陶芸家小山喜平と二人で、研究費は一年間十五万円。約一年半、支援を求めて各地を回ることから始まった。小合先生の紹介で染織の会社からも寄付をいただいた。ある日、京大を通じ、ペルシャ湾に油を買いに行く船があることを知り、砂漠と高原を走るためのバンを用意し、日産にも半月ほど通って整備を習い、特製のタイヤを付けてもらいイランの港に送り込んだ。

丸善石油のタンカーに便乗し日本を出発。

十七日間ノンストップで進んだ。途中インド洋、アラビア海など海平線に大きな夕日が落ちるのを何度も見て、地球が球体であることを体感したという。ペルシャ湾に入った時のことは忘れられない、雷が鳴り、稲妻が水平に走ると同時にあらが降り出し、音響箱と化しすごい音がした。ようやく岸が見えだすと茶褐色一色の中に石油会社のタンクがダットと並ぶのが目に入った。クエートに上陸。スークには、金工細工や織物工房があり、夕日が沈むと顔まで被ったチャドリを通して、きれいに化粧した女性の姿が見えた。

こうして初めての異国イスラムの生活を少し経験し、イランへ飛んで、日本から送り込んだ研究資材車を荷受けし、以後一年がかりでイランを中心に、西はギリ

シャ、東はインドまで交替でハンドルを持ち、四万キロ踏査の旅を続けた。道なき道を行ったが、シルクロードのルートはほぼそのままだった。ただシャマル（砂嵐）が吹くと五メートル先は見えず、ときおり蟹気楼が起きた。カナートという地下水道が掘られ集水し、そこに集落があったが、水が枯れると猫の子一匹いない。そういう厳しい場所です。車がエンコしたら大変だ。一番初めに覚えた現地の言葉は「ベンジン・コジャ（油はどこですか）」。「一年を通じて山に緑がない。これはたいへんなショックでした」。

食べ物は、硬い羊の肉と蒸した卵をナンに巻いたものや、南方の果物とエビアン水。また、日清食品から新発売のチキンラーメンを出国前に二百食提供していただいたものを食べたという。

気候も極端だった。モヘンジョダロ遺跡の北は世界で一番暑い所で日中車は走れないためマンガの木の陰で寝て、日が落ちてから動き出した。インドでは大使館の歓迎を受けたが、他は車の中や駱駝と行商人のための宿に泊まった。夜になるとイスラム教徒が礼拝を始め、寝ていられない。気温は五十度まで上がり、車のボンネットの上で卵を割ると目玉焼きができた。

一方、極寒も経験した。イラン、トルコの国境地帯では、五メートル級のアナト山は雪に覆われていた。五メートルの雪



の壁に囲まれた道を大型トラックに続き、小さい車は轍を避け、傾いて走った。アルメニア地方では零下二十度となり、朝起きてエンジンがかからないというハプニングも起きた。シーバスからアンカラ、イスタンブールまでは高度千五百メートルの山の中、イランも大体千二、三百メートル。なんとか雪のない北の黒海沿岸を行くと、目にしたのは高床式の家だった。「正倉院と同じものがあるのは驚異でした。形も非常によく似たものなのです」

国が替われば宗教も食事も、そして染料も替わった。水牛がいるのはインドまで。イスラム教の世界は羊のみだった。トルコに入るとボルシチがあり、ヨーロッパの香りがした。赤い色の染料は、日本や中国では蘇芳や茜、紅花など植物性の赤であるが、トルコから西と南米はコチニールというサボテンにつくカイガラムシから採った染液だ。またトルコに入るとアラブ系の人が増え、宗派もスンニ派に替わる。こうしてさまざまな大変面白い経験を重ねた。

旅も終わりに近づく頃には過酷な生活ですっかり強靱な体になっていた。インドのカルカタまで戻り小さな貨客船でチャゴン、ラングーン、香港で荷物を積み下ろしながら一カ月かけて帰った。東シナ海は荒れがひどく、行きは酔ったものの、帰りの小さな船は転がるくらい揺れたが、二人とも全く平気だったのだ。

帰国後は読売新聞の後援を受け、「シルクロードの生活と美術」展を大丸、大阪阪急、岩田屋などで開催した。撮りためた写真や遊牧民の布、土器などを展示。当時はベルセポリスの遺跡に覆いなどはなく彫像や細かい浮彫まで鮮明に写真に撮れたという。インドでもそうだった。貴重な記録は現在大学に保管されている。

#### 自然、民族、宗教を肌で感じて

この旅で、厳しい風土と宗教や美術の関係をひしひしと感じた。高原と砂漠の中、地方の土候や首長は人々のために憩いの庭園を造った。緑を植え、水を流し鳥を飼って、毎週金曜日はみながそこに集う。そこから、オマルハイヤームなど有名な詩人が誕生したという。また、三月下旬のイランの正月頃だけは山に少し緑が出て、庭園は花畑になる。それをイスラム教徒は肌で感じ、カーベットの模様織り込んでいった。水がない土地でペルシアンブルーやターコイズブルーのドームやモザイクによる建物を作り、精神的な憩いを得るのだ。イスラム教徒は日に五回メッカに向かって礼拝し、何回かはモスクへ出かけカーベットの上に座り折る。頼るのはアラアの神。宗教が美術に繋がり、アラバスク文様の世界ができあがった。こうして向こうの工芸は厳しい風土を背景に必然的に生み出されたものと



「桂林只中」 2005年 第37回日展

いえる。

そこで中井さんは思った。これだけ四季折々の自然豊かな日本にいる以上、そこから得たものを作品にしたい。山で囲まれた京都の街では夕刻になると愛宕山を背景に、西の山は夕日を背負って完全に藍のグラデーションになる。薄い青から濃い青。藍の世界は日本独特の水を含んだ潤いのある世界。中東の乾燥地帯とは正反対の世界だけに、余計に思いは強くなった。

#### イスラム文化がなければ今のヨーロッパ文化はない。「混淆の美」を実感

中井さんの探求心は東から西へ広がった。四十代前半、文化庁在外研修員として一年間、ヨーロッパで走行三万五千キロにわたる、車による研究の旅に出たのである。

織場や染場などを見ようと地方を回った。たとえば、各城に残っているタピスリーやゴブラン織。フィレンツェの工房で十五世紀頃の織機を見たり、ザクロを踏んでなめすモロッコ、フェズーの皮のなめし、フランスの美術学校など、各地を訪ね歩いた。ピレネー山脈を超えサンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼の道も走った。バルセロナでは施工を手伝った左官屋にアントニ

オ・ガウディの話聞き、アンダルシア地方で東西の文化が溶けあい、イスラム教美術とキリスト教美術の作る「混淆の美」を目の当たりにした。

イスラムはヨーロッパに先んじた一つの文明を作り上げた。「工芸技術は東から西に行きました。たとえば、エジプトのコプトはヨーロッパに行き、ゴシック教会の壁面を飾るタピスリーができました。マジョルカ陶器はイスラムの製陶法が十世紀にスペイン南部に伝わったもの。インドやペルシアの更紗もヨーロッパに伝わり、ベルサイユやシェーンブルンの庭園も、みなシンメトリカルなベルシア庭園です。ベルセポリスはパルテノンより百年ほど古く、イスラムの印刷や紙の技術も古い。イスラムが無かったら今のヨーロッパはないのです」東西文化交流の旅は中井さんの中で帰結した。帰国後、資料や撮りためた写真をもとに「タピスリーの美」をはじめとする三冊の本を書いた。

#### 師の言葉「誰にでもできる技術で誰にもできない表現を」

こうした若い時の体験を根底に、ふらりと出かけて予期せぬものと出合い感動したことや、風景、建造物などが時間の経過とともに醸成され、ふとある日甦ってくる。そのイメージの世界（心象）を創り出すべ

く制作を進めている。そして中東の苛酷な自然風土の体験から、日本で育まれた藍という染料にこだわり、作品を制作。それは現実にあるものではなく一つの抽象、ファントジーの世界のものとなる。しかし、できあがった作品にはどこかリアルティや迫真性、独特の匂いのようなものがなければならぬと考えている。

現在AIの発達は目を見張るものがあるが、AIでは決して追いつかない世界が「自然」と「手仕事」だと語る。これらは残さなければいけない。そして創作の世界で同じものは作らない。「小合先生は、『誰にもできる技術で誰にもできない表現の世界を』とおっしゃっていた。技術はある程度やれば誰でもできるが、表現はできない。それはやはり大事で一生懸けてやらなくてはいけないと思っています」

二十代の終わりに車で一年間、走り抜けた中東諸国の記憶はいまも中井さんの脳裏に鮮明に甦ってくる。正倉院の御物のルーツであるベルシアの美術や文化を自分の目で見たい、ここが原点となり、帰国後は日本の自然の素晴らしさを改めて感じ、藍を用いた作品のなかにそのイメージが脈々と湧き出ている。技術を基にしたオリジナルの表現の深さ、その奥には東西合わせ七万五千キロの旅の記憶とイメージの醸成が深く閉じ込められているを感じた。



「火山去来」 1982年 第14回日展

# 黒田賢一

書家  
日展理事

姫路駅から車で十五分ほど、閑静な住宅街に黒田さんのアトリエがある。姫路に生まれ、二十二歳で日展初出品初入選という驚くべき若さで頭角を現し、戦後生まれで初めて審査員を務め、現在、日展理事として後進の指導にもあたられている。その作風は、かな古筆の関戸本古今集、一条摂政集、光悦書状に現代性を加味したもので、大胆な大字かなを中心に独自の世界を確立してきた。明るい日差しの入る応接間で、これまでの出会いや歩みを伺った。



## Profile

Kenichi Kuroda

1947年、兵庫県生まれ。西谷卯木に師事。1969年、改組第1回日展初入選。1986年、第18回日展「山里」により特選受賞。1990年、第22回日展「ふじの雪」により特選受賞。2003年、第35回日展「深雪」により日展会員賞受賞。2009年、第41回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「小倉山」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本書芸院理事長。

## 西谷卯木先生との 十九歳での出会い

黒田賢一さんは一九四七年、姫路に生まれた、団塊の世代である。戦後間もない頃は読み書きそろばんの時代で、村の公民館でお寺の住職さんが習字を教えており、黒田さんもそこに習いに行っていたという。「当時は、『正しい姿勢は正しい心から』と三回唱和してから練習をしていました。また、たまには振り向いた子に墨をつけたりと、遊びも楽しかったです」

中学・高校時代は新聞部に所属し、卓球をしたり、書道からは離れていたが、高校三年の時、きれいな字が書きたいという単

純な発想から、姫路の先生にまた書を習い始めたという。すると、その先生が「日展の審査員で西谷卯木というかなの先生が神戸に月に一度来られているので君もそこへ行ってみるか」と声をかけてくださった。半紙ではなく半切などに書いて持っていってたら「ちよつと面白い字を書くな」という感じを抱かれたようで、その後、家に習いに来るよう言われ、神戸の長田にある西谷先生の家に通うようになった。

西谷先生は左腕がなかった。正筆会の創始者で文化功労者の安東聖空先生の番頭役であったが、神戸の空襲で焼夷弾の直撃を左腕に受けるという惨事に見舞われたのだ。左腕を失い悩んでいる西谷先生を心配した安東先生に「両腕があるというのは相

対。片腕になるということは絶対。だから絶対に勝るものはない」と励まされ、この発想でハンデを逆手にとって奮起し、日展の大賞を受賞、評議員にまでなられた。「弟子には優しい先生でした」

## 二十二歳で初出品初入選

「日展に出す前には二泊三日の錬成会が佛寺で開かれ、一五〇人ほどが集まりひたすら練習し、眠くなったら毛氈の上で紙をかぶって寝る、そういうことが当たり前



「春愁」 2013年 現代書道20人展

で、みな必死でした。折しも改組第一回目の日展の時で、以前は二、三割あった入選率が一割になっていました。日展に入選するのはたいへんなことだと先生から聞いていて、『一生のうち一回くらいは入選したい』という願いがありました。そうした中、黒田さんは初出品で初入選の快挙を成し遂げる。二十二歳の時だった。

神戸で、先生から「入選したぞ」と言われ、そこから家にどうして帰ったか覚えていないくらい嬉しかった。その後、会の研究会があり、「初入選した者は皆の前で席上揮毫せよ」と言われ、緊張し手が震え、文字が書けなかったことを今でも鮮明に思い出す。

その翌年も入選したが、次は二回連続で落ちた。「なぜか」と悩んだが先生からの明確な答えはなかった。しかし、進む方向は自分なりに間違っていないと思い、気持ちを強く持つて迷わず続け、その後は連続入選を果たした。

## 西谷先生の書と 人柄に感服して

西谷先生から教わるなかで、目からうろこの出来事があった。ある日、突然に家にお伺いした時、奥様に二階の書斎に上がるよう言われ、ガラス戸越しに目に飛び込んできたのは、普段は優しい先生が、必死の



「ふじの雪」 1990年 第22回日展

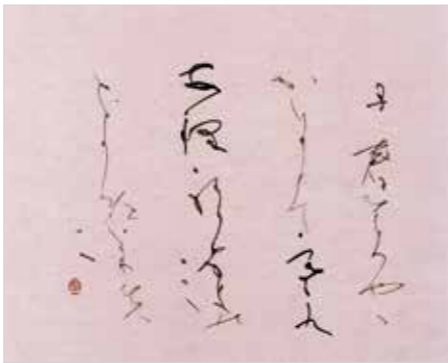
形相で作品に向かわれている姿だった。周囲は紙の山で、愕然とした。「一時間近くずっと黙ってガラス戸越しに廊下に座って先生の様子を見ていました。先生でさえこんなに書かれるのに『自分の努力はまだまだ足りない』と反省したのです」

村上三島先生は「作家である前に職人であれ」と言われていた。自分の理想を表現するには技術がなければ、そのためには書き込まなければと。先生のその姿を拝見し大きな刺激を受け、それからは、紙一反百枚を二、三日で使い、二回目の特選のときは千五百枚もの紙に書き続けたという。

## 壁面芸術として、 強い線のかな作品を作りたい

「かなは、漢字を元にして平安時代に創りあげた日本固有の文字です。古来、四季折々の風情、心の機微等を詠った和歌や俳句を書き表してきました。元々は机上芸術で流麗で柔らかいイメージですが、壁面芸術としての大字がなを書くためにより強い線をひきたい、今までのないようなかな作品を作りたいという気持ちが芽生え、いろいろな葛藤がありました」

その気持ちが黒田さんの書の根幹となっていた。当時西谷先生は「高野切一種が基本なのでそれをやれ」と言われたという。しかし、黒田さんはどうしても高野切一種



「早春」 2018年 第2回美の魁けー日展の現代ー

今年、元号が令和となった。万葉集の第五卷梅花三十二首の序文から引用されている。その記念する年でもあるので、歌の意味も、又、自分の表現にもマッチする歌なので、日展出品作は三十二首の中より選文してみた。「梅の花、今盛りなり百鳥の声の恋しき春来るらし」である。

また、書は白黒の芸術であるが、若い頃から書に色どりがほしいと考えていたという。「それは実際の色ではなく、墨の濃淡や余白が大事と常に思っているのです。それで自分自身の書の会を輝彩会としました。当時、書の会としては変わった名前と思われていたのでは……」と振り返る。

「数年前、ある日本の高名な絵の先生がたまたま僕の作品を見て、『黒田さんの作品



「夕雪」 2018年 改組 新 第5回日展

はとても絵画的だな』と言ってくださったのです。特に白がきれいだと感想を述べてくださいました。ありがたく嬉しかったです。僕は『線と白をいかに充実させていくかを基本姿勢としています』と答えました。池大雅が『描かない白を描くのに一番苦労する』という意味のことを言っています。これからは、さらに白と線の充実をはかっていきたい。そして最終的に作品は『品格』が大切で、長く長く見ていたいと思っています。ただ、作品を書きたいというのが私の思いです。芸術としての書の作品は読めるからいいとか読めないからだめだとかではなくて、絵画を見ようという目で『なんとなくいいな』と、内容は後でいいと思っています」

西谷先生からは不屈の精神と書作に対する真摯な姿勢、他人に対する優しさを学び、「大きな文字を書け」と教えてくださった青山先生のことばを糧として歩んできた。古典、古筆に立脚しながらも余白美の美しさを求め、「大字かな」を中心とした強さのある作品で、現代的で大胆な書の世界を展開する黒田さん。書への情熱と、人一倍の努力を通して、若くして書道界を牽引するお一人となられた。穏やかで気さくな人柄に惹かれ、多くの書を学ぶ人々が、今日も黒田さんの元を訪れている。



「旅人」 2015年 第67回正筆会展

が好きになれず、「やっています」と応えながら、強さがあるかな古筆の関戸本古今集や一条摂政集を練習していた。「従順でありながら自分の中では先生とは違うこともやってみたいというのが常にあった。先生はそういうところを認めてくれていたのだと思います」と振り返る。

そうした先生の元で、濃密な十四年間を過ごした。先生亡き後は西宮の漢字の木村知石先生を西谷先生の奥様からご紹介いただき、二年間、作品を見ていただいたり、また先生方の歩み方を直にお聞きして学ばせていただいた。

研鑽を深める中、一回目の特選は全く予期せぬことだった。三十九歳の時だ。「和歌一首で出したのですが、かなの表現としては非常に変わっていました。光悦などからヒントを得て、大胆な動きとシャープな雰囲気を出そうと考え出品した作が、たまたま認めていただけたのかなと思っています」

青山杉雨先生から  
「大きな文字を書け」と

二回目の特選はより難しいと言われていた。そうしたときに、東京の青山杉雨先生に見ていただく機会を得た。縦作品、横作品等々四種類の作品を見ていただいたが、「こんなのはダメだよ」とただひと言、言

われた。そして、「君の持ち味は何か、『も』と大きなものを書け」と……。それまでは大字でも三十一文字の和歌中心の素材を選んでしたが、十七文字の俳句で挑戦してみようと考え、五、六句の選文の中から最終的に決めたのが「一尾根はしぐるる雲かふじの雪」という芭蕉の句だった。幸いにも大書で挑戦した作品が評価され、二度目の特選を受賞することができた。

黒田さんの道は決まった。一度目の特選からわずか四年後の四十三歳の時に二度目の特選を受賞することになる。その後、「現代書道二十人展」に昭和生まれの最年少で入り、朝日新聞が大きく取り上げた。「本当に幸運でした」と語る黒田さんは、何倍



もの努力を重ねていた。日展の審査員になるのも戦後生まれで初めてのことで、若くして書道界のスターとなった。

書作にあたり、平日頃心がけているのは無心で書くということだ。ちよつと良い作品ができたとき、後で振り返ったら何も考えていなかったという。夜にはできたと、思った作品が、朝起きたら全然だめだと、そういう繰り返しである。

日本の伝統文化の  
中心的存在の書

今、書をめざす人や書道界について伺った。「現代はいろいろな生活が充実してい

日本画

# 山田まほ

日本画家  
日展会友

昨年、「今回の画面は山の個性から離れ、記憶としての山、又、その山の霊性にまで食い込んだ秀作である」と評され特選を受賞した日本画家の山田まほさん。不思議な気配、胎動のようなエネルギーに満ちた風景画が印象的な山田さんに、描く上で大切にしていること、テーマなどについて話を伺った。



## 日本画の魅力と メキシコ・グアテマラ旅行

神奈川県相模原市の、のどかな住宅街で生まれ育った山田まほさん。幼少時代は外で木登りをしたり活発なところもありながら、同時に家で本を読むのも好きな少女だった。高校進学に際して自分が何をやりたいのかを考えた時に浮かんできたのが絵が好きということだった。創設して二期目の県立弥栄高等学校（現県立弥栄高等学校）は、普通高校でありながら美術コース（現・芸術科）があり、絵を描く時間を多くとれるということもあって進学を決めた。「一年生のうちは美術コースを選ぶと美術の時間

数が少し多くなるだけでしたが、二年になると一日のうちの午前中はずっとデッサンの日があったり、週の時間割の中で美術の時間が増えていきます。デッサン以外にもデザインや平面構成、油絵、水彩、それに粘土で形を作ることもやっていました。出来て間もない学校でしたし、今考えるところとらびりと学生生活を送っていました」

高校生活も半ばにさしかかると、大学受験を意識するようになる。「高校に入学した段階では特に美大に進学しようとか、日本画を描こうと思っていたわけではなく、大学受験のことを意識するようになって、美大に行こうかと考えるようになりました。学部については、油絵の素材感がどうもあわず、匂いなども苦手でした。水彩の方が

好きだったので、日本画のかなと選びました。高校時代には日本画は一枚しか描いたことがなく、本格的に描き始めるようになったのは大学に入ってからです。当時、日本画をそんなにたくさん見ていたわけではないのですが、やはり日本画の線の印象が強くありました。それから質感も惹かれたうちのひとつだと思います。マチエールも、色の見え方も日本画特有のものですからね」

大学の学部を卒業後は聴講生として二年ほど大学に残り絵を描き続けていた。その後もアルバイトをしながら絵を描き、個展を発表の場としていた。二年の聴講を終えた翌年、生まれて初めての海外旅行でメキシコとグアテマラを訪れたが、その経験は

その後の制作に対する姿勢を少しずつ変えるきっかけとなったようだ。「たまたま機会があって織物を見に行くことになり、遺跡にも興味がありましたし、深くは考えずに面白そうだと思って行くことにしたんです。グアテマラは十六世紀半ばにスペインに侵略されていますが、もともとの人たちはどうも日本人と感じが似ていて、なんとなく親しみを覚えました。ティカールの遺跡はてっぺん近くまで登ることができて、

そこに着くとジャングルが見わたせて素晴らしい景色でした。帰国してから遺跡のうちの一部と教会の印象もあわせて描いたりしました。教会の中は暗い、率直な祈りの場という感じでした。昔からの祈りの場とされる所には不思議な形をした石が立っていて、ちよつとした広さがあり、お香を燃やした缶のようなものを振りながら祈りをする、端から見えてちよつと怖かったんですが、薄暗く妙な空気があつて奥深い印象でした。個展を始めた当初は自分のイメージや頭の中で考えたことばかりが先行していましたが、メキシコ・グアテマラを訪れたことで少しずつですが変わっていったように思います」

## 音や風、感触を画面に描く

そうしたメキシコ・グアテマラでの経験を経て、今は次のように思うようになったそう。だ。「年を経るごとに、訪れた場所で風の音が聞こえたり、そこで感じたものを大事にして絵にしていくなことの大切さを実感するようになりました。折に触れてスケッチに行きますが、観光で喜ばれるような快晴の時は、あまりうまくいかないんです。反射してしまうのかもしれないのですが、聞こえてくるものがわりと少なく……。霧がかかっていたりなかなか全容が見えない時に一瞬だけ雲が切れてその向こ

うに山肌が現れる時や、描いていたものすごく風が吹き下ろしてきて飛ばされそうになり、地面に這いつくばって我慢したり、やっぱりそういうことがとても大事だと思っっています。以前、滝が見えるちよつと出っ張った木の根っこところでスケッチしていたら、すぐ近くに鮮やかなエメラルドグリーンの芋虫がいるのに気がついて、すごく綺麗だったんです。虫は苦手ですが、思わず見とれてしまいました。やはり自分にとっては音や風、感触などがとても大切です」

## 日展に出品する魅力

個展で発表を続ける中で、恩師から公募展などに出すのはとても良い勉強になるから試しに出してみればと言われ、初めて日展に出品をした。その時は抽象的な作品だったが入選はできず、その後には滝を描いた作品で二〇〇一年に初入選を果たす。「日展の会場に絵が展示されると自分の足りないところが見えてきます。そして入選したからといって、それで良いわけではない、作品に対して先生方に色々とコメントをしていただけることがとても勉強になっています。日展に出品する以前、土屋禮一先生の作品を拝見し、何かじんわりとしていて懐かしく、かつ哀しくもあり、よろこびも含まれた風景が、とても印象に残って

「牡丹玄想」 2009年 第41回日展





「TANEIKE」 2016年 改組 新 第3回日展



「山ノ図」 2018年 改組 新 第5回日展 特選

チをしますが、どうも取材というよりは浄化のために行っている感触です。自分が表現するというのが少し違うような気がしているんです」と山田さんは語る。その言葉は、どこか古くからの日本人が自然とともに歩み生きてきた姿そのものに通じるところがあるように思える。

### 日本画の絵具の声を聴く

日本画の場合、岩や土、貝殻などを細かく砕き、そこに膠をまぜて画面に定着させ

ていく。油絵具や水彩絵具など、すでに媒材が混ぜられたチューブ絵具が一般的に使用されている画材と比べると、自然の姿に限りなく近いともいえる。だからこそ、山田さんにとって、日本画の画材で描くのがもつとも自然なことだったのではないだろうか。「大学時代の先生が日本画の絵具は素材である前に、それ以前の様々なものであった時の記憶を持っているというようなことを仰っていたのですが、その当時はまだその言葉を実感として理解してはいなくて、絵具を使って描いているという感じで

した。それが今は絵具を使わせてもらっているというか、絵具に聴きながら描いているという感じでしょうか。日本画の絵具は素材の特徴として画面上で迷うと色が濁りますし、発色も悪くなります。半端な態度で画面に向かえないように思います」

スケッチに行き、そこで見たものの、感じたもの、それを自身の中に積み重ねていつて、あるとき形として風景の姿が生まれてくる。「須賀川の牡丹園で朝から夕暮れ時まで牡丹をスケッチしていた時には、花も決して静止しているのではなく動いているのがよくわかりました。そうやって花と一緒に呼吸をしていると、土の中から天に向かうような、生命力のようなものが感じられ、それを絵にしたいと思ったんです。また山もたんなる山ではなくて、生きている存在です。見ていると雲も流れてくるし、鳥や虫もやってきます。やはり常に動いているんです。何を描きたいのかと言われるとちよつとうまく言えないのですが、ただ風景の中に入っていくと自分の存在というのはとても小さいのだと実感します。その感覚をもてる事は有り難く、そう思わせてくれる何かが、画面にあらわれてくれたらいいなと思っています」



いました。日展には大学で教鞭を執られていた川崎鈴彦先生や那須勝哉先生そして大先輩の土屋先生、東俊行先生などがいらっしやったので、日展に発表できることは自分にとってすごく大きな意味があります。鈴彦先生が以前、書かれていた文章の中で、吹雪、もしかしたら嵐の中かもしれないませんが、そういう中でもデッサンは出来るという言葉に触れた時にはっとしました。たしかに雪の中にスケッチをしに行くと、手がかじかんでしまうけれども、雪を踊らせる風を全身で聴く事はできる。その時は分かんなかったことが、後になっていろいろと大切な言葉を頂いていたと分かるようになりました。そのたびに己の足りない浅はかなところを突きつけられる感じです。そういう先生方がいらっしやるのが、やはり日展の魅力です」

### 気配、水気、空気など すべてをはらんだ何かを形に

山田さんの作品からは荒涼と広がる風景の中に、かすかに大地の胎動のような息吹や気配、そこに吹き渡る風、湿り気を帯びた空気の質感、そして流れゆく静かな時間を感じられる。昨年の日展で特選を受賞した「山ノ図」はまさにそういった作品の一つだろう。「この作品はどこか特定の山のイメージではなく、山に分け入っていくそ



の印象を絵にしたいと思って描いたものです。時おり中国の詩の本などを分らないながらも眺めている時があり、この作品を描いている時には王維の『空山人を見ず』という詩に出会ったんです。『空山人不見人 但聞人語響 返景入深林 復照青苔上（空山人を見ず。ただ人語の響くを聞く。返景深林に入り、また照らす青苔の上）』で、その感覚が自分の実感にとても近いものでした。山に分け入っていくと、茫洋として樹木も鬱蒼と茂ってくるのですが、同時に逆に開けていく感じがします。そうすると向こうの山のほうにある気配、水気とか空気とか地熱などもすべてをはらんだ何かがそこに存在しています。スケッチの段階では描いていた木なども無くして、最終的にこの山ができました。これは今まで描いていた山のイメージがすべて合わさったものなんです。稜線のあたりのラインなどは以前描いた月山のものであったり、たまたま振り返った時に一瞬だけ見えた山容や吹き渡

る風のイメージを思い出してそれをまとめて構成していったものです。今、自分がいるところだけではなく、向こうはもっと時間のスパンの長いところで存在しています。そういうものがすべて表れるように描けたらいいですね」

日春展で奨励賞を受賞した「種池」は、古くから地元の人々が水乞いをしたり、祈りのために使われてきた場所だそうだ。「この池は自然に水が溜まってできたもので、古くから人々により大切にされてきた所です。結界が作られていたり、ちよつと神聖な感じも受けますし、季節を変えて行くといつも違う表情を見せてくれます。初夏の頃にたまたまスケッチをしていたら、種子の舞う時期だったのかはわからないのですが、綿毛のようなものが一斉に池のほうに向かって、奥の道からふわっと飛んできたんです。それを見た時に、「散華」という言葉を自然に思い起こしました。『草木国土悉皆成仏』という言葉がありますが、まさにその言葉通りのものでした」。訪れた先で見えたものの、感じたものの、経験したことが自身の中に積み重なり、おのずと絵として生まれてくる。山田さんの制作姿勢は画面を自分の意志で無理して作り込んでいくのとは少し違って、風景や植物から得たものが自然と山田さんの手を通して画面に形になっていくようだ。「何年か前から戸隠や妙高などを訪れていて、もちろんスケッ

洋画

# 金築秀俊

洋画家  
日展会友

古の世界が色濃く残る出雲の地に生まれ育ち、現在も同じ場所で小学校の教諭を勤めながら日展、東光展に発表を続ける金築さん。昨年には日展特選を受賞し、ますます注目が寄せられる金築さんの出雲のアトリエにお邪魔し、絵を描くことと教師としての仕事の両立、これからの目指すところなどを伺った。



## 自然に恵まれた神話のふるさと 出雲で生まれ育つ

西に夕日が沈む日本海、東に宍道湖、南北は山々に囲まれた豊かな自然が広がる出雲。出雲平野の北にある山塊と西の砂浜は『出雲風土記』の「国引き神話」でヤツカミズオミツヌが海の彼方から綱を使って国を引き寄せた場所、砂浜と山塊の境にある浜は『古事記』の「国譲り神話」でオオクニヌシと高天原からきたタケミカヅチが国を譲る話し合いをした地、そして市内を流れ宍道湖へとそそぐ斐伊川は八岐大蛇神話の舞台となったと言われる。十一月（旧暦十月）は神無月と言われるが、出雲の地では神在月とされるのは、この月に全国の神々が出雲大社へと戻ってくるため。今も

この風土の中には、古の神々の気配が見え隠れする。

そうした長い歴史と文化が色濃く残る出雲の地で金築さんは生まれた。幼い頃には近くの川や海で泳いだり、生き物を捕ったり、大自然の中でのびのびと育っていった。絵を描くことは、幼いころより大好きで、保育園や小学校で描いた絵の記憶は、今も鮮明に残っているという。金築さんの父は書画骨董などを好み蒐集も行っていた。そんな父に連れられて小学生だった金築さんは、初めて松江で開催された日展の会場を訪れた。「当時は美術館がなく、会場が科ごとに分かれていました。中でも洋画の印象が強く残りました。どの作品にも異なる魅力があり、その迫力に圧倒されました。まさか自分が日展に出品することになるとは夢にも思っていませんでした」

高校では恩師にあたる東光会の有馬侃氏が教鞭を執っていて、その授業で初めて油絵の画材に触れることになった。「画集でセザンヌやモネなどの油絵を見ていましたし、日展にも何度か行っていたので、油絵に対して憧れがありました。初めてチューブから出して油絵具を画面においた時に、水彩とは違う光沢や粘りがすごく新鮮でした。今まで使っていた道具とは違って木の箱に絵具が整然と並び、桜の木のパレットが入っていて、なんだかちよっと高級感がある。最初は扱いにくかったですが、とにかく初めてのモチーフの人形を一生懸命に描きました」

油絵に対する強い憧れを持っていた金築さんだが、将来は小学校の教諭になることを早い段階から決めていて、画家になるために美大に行く選択肢はなかったそうだ。

## Profile

Hidetoshi Kanetsuki

1961年、島根県出雲市生まれ。1994年、東光展初入選（以後26回出品）。1999年、日展初入選（以後18回入選）。2018年、改組 新第5回日展特選。現在、日展会友、東光会会員 審査員。



「静かな時」 2014年 改組 新 第1回日展

そのため高校を卒業して、大学に進学し、念願の小学校教諭になってからしばらくは、ほとんど絵を描かなかったという。「描く機会はあまり無かったのですが、油絵の道具は転動するたびにもなぜか必ず持って歩いていました。ときどき地域の美術展に出品する程度でした」

## 不思議な縁

そして三十代になったころ、あらためて絵を描いてみたいと思い、叔父から絵画教

室を紹介されて出向いた先の先生が東光会に出品する画家だった。二・三度、絵画教室に通った頃、本気で絵を描くつもりであれば東光展に出品するように勧められ、一九九三年に東光会山陰支部山光会に入会した。「東光会に入ってから、中学生の時の校長先生や高校の同級生など旧知の人も所属されていて、恩師の有馬先生もいらっしやるのが分かったのです。好きだから描いていただけだったので、東京に出品すると聞いて、とりあえず八十号のキャンバスを買ったものの、この大画面を前にして、



どうしたものかとまどいました」。不思議な縁がつながり、本格的に展覧会に出品するための大作を描くことがスタートした。そして翌年には東光展に見事に初入選・初受賞を果たした。「当時はアトリエもなく、車庫で描いていました。天井が低くて電灯の光も画面に反射してくる。夏は蚊にくわれ、冬はとても寒い。東光展は春に開催されるので、出品作品を描くのは冬から春先にかけてです。それで小さなストーブで暖をとりながら描き、持ち込んだソファの上で毛布にくるまって寝るということもありました。本当に歯を食いしばってやっていたという感じで、ふりかえると、よくあの環境で出来たなと思います。でも止められなかったというか、時間も無いから余計に燃えるというか……。技術はついていっていません。気持ちだけは負けないという思いで描いていました。離島の隠岐に転勤になった時も、フェリーに乗って勉強会に参加し、作品を見ていただいたらまたすぐに戻るというようなこともしていました」

## ボクサーを描くという人

教師の仕事は土日にかかることも多く、絵を描く時間は休日を除けば、夕食後から深夜に及ぶ。だからこそ逆に集中して熱の籠った作品を描くことが出来るとも言えるし、それだけ絵に対する強い思いがそれを



### 小学校教師と絵の両立

現在も学校の仕事で連日多忙を極めているが、夜の空いた時間は必ずアトリエで制作に励む。教師の仕事と絵を描くこと、両方に対する熱意は今も消えることがない。「教師の職はなかなか奥が深く、同じことを教えるのも毎回、生徒たちの反応は違います。教師という職は、ずっとやりたいと思っていたとても好きな仕事です。ですからそれを適当に済ませて絵の時間に割こう



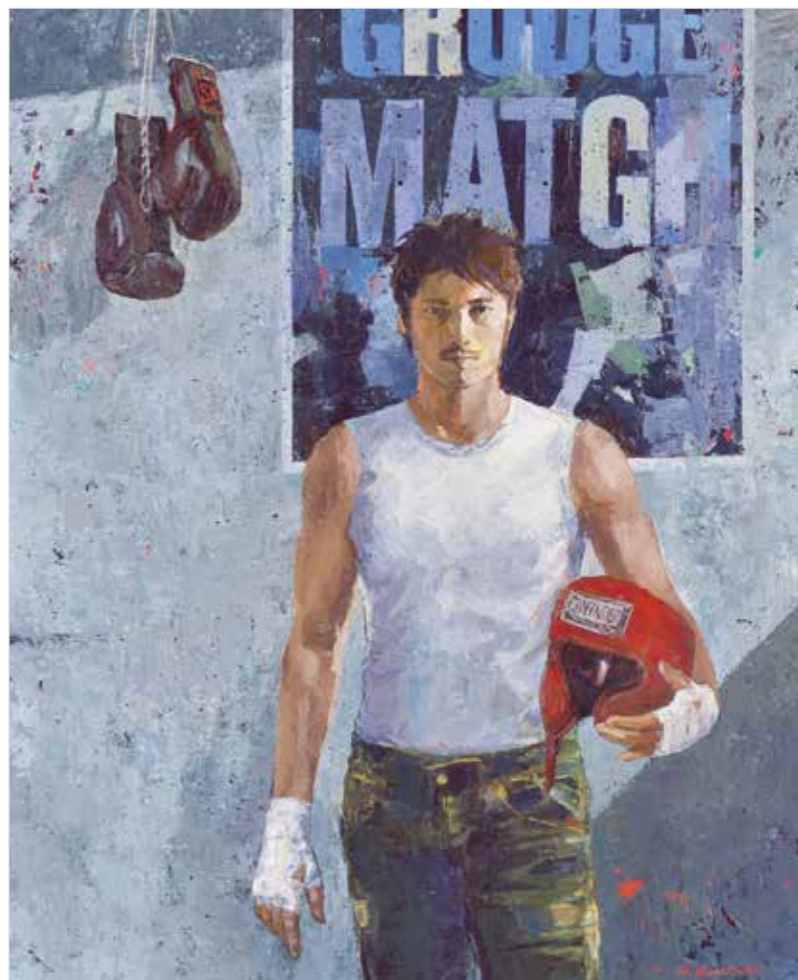
支えているとも言えるだろう。どんなに忙しくても毎年、東光展には作品を発表し続け、九九年には日展にも初入選を果たした。それから毎年、正月休みと春休みに東光展、夏休みに日展と集中して作品作りを続け、昨年の日展では特選を受賞することができた。「まさか特選を自分がいただけるようなレベルではないとずっと思っていたので、特選と聞いた時は本当に驚きました。なにしろその前の年には落選していましたから。しかも昨年の日展に出品しようと描いていた作品を東京の研究会に持っていくと、先生方からこれではダメだと言われてしまったのです。それでもう一枚、描きかけていたものがあって、まだ途中だったのですが、たしかにその作品のほうに迫ってくる力があるかもしれないと思うようになり、時間も限られているのでこれで勝負をするしかない」と夢中になって仕上げました。だから特選受賞に関しては、私自身だけではなく、周りも驚いていました。ただ運良く特選をいただけただけで、まだまだ足りない部分がたくさんあります」

授賞理由として「ポスター等の渋い色調の中で適所に効かせた白の魅力と、間の取り方、焦点となる顔の描法が相俟って、鋭い切れ味を見せる佳作である」と評された「ボクサー」は長らく金築さんが手がけてきたモチーフだ。

「自分も大学時代の四年間はボクシングを

やっていました。自分がどこまでやれるのだろう、自分の限界に挑戦したいという気持ちがありました。たくさんスポーツがありますが、ボクシングの道具は拳を包むグローブだけ、たった一人リングに上がり、まさに頼れるのは自分の力だけです。その緊張感や高揚感は経験した者にしか分からないものです。

私の中には、悩みや苦しみを乗り越え、目標に向かってひたむきに突き進んでいる、



「ボクサー」2018年  
改組 新 第5回日展 特選

真っ直ぐな眼差しの人物が描きたいという思いがあります。ボクサーでなくても例えば子どもを描く時も同じ気持ちです。子どものもつ純粋さ、一生懸命に頑張る姿。その姿に自分も感動し、それを表現したいのです。そういう描きたいテーマと、ボクサーというたまたま自分がやっていたことが結びついたのは幸運なことだと思います」

とは思っていません。教師の職をいい加減にして絵で賞を獲っても意味がない、それをいい加減にしていたら、どちらもダメになるという気がしているのです。小学校の教師をしていて、人を育てるというところ

がましいのですが、子どもと一緒に育っていく。そういう一生懸命やっていることが制作の姿勢に繋がっていくと思います。

自分は子どもからたくさんさんのエネルギーをもらっている気がします。子どもたちが『先生、おはよう』と言ってくれるとそれだけで元氣になります。大人とは違う力をもっていますね。生徒の前でマジックをすることもあるのですが、一年生などは『マジック先生』と呼んでくれます。すごく可愛いのです。その子どもたちとの関わりが自分にとっては宝物なので、それと絵を続けてこられたこと、その両方をやってきたことがどちらにとってもプラスになったと思っています」

### 狂気を感じるくらいの 迫ってくる人物像を目指して

出雲は蕎麦でも有名な土地だが、金築さんはただ蕎麦を打つだけではなく、実際に蕎麦の実を畑に蒔き、収穫し、粉をひいて、蕎麦打ちをするという最初から最後まで工程を自分で実際になさったそうだ。自分の手の内ですら一つひとつをきちんと

確かめていくような行為は、どこか金築さんが誠実に油絵具を一筆一筆キャンバスにのせ、ボクサーというモチーフの実体を理解し掴もうとするようなところとも共通するように思われる。

「時代に逆行するかもしれませんが、私は自給自足に憧れています。衣食住の全てで自分にできることをしてみたい。蕎麦を種から作るのはあまりにもたいへんで三年で止めましたが、何でも一度は自分の手でやってみたいという気持ちがあるんです。アナログ人間なんですね。これから彫刻、木工、陶芸などいろんな分野にも挑戦できたかと考えることもあります。評価されなくてもいいから、自分の絵に満足できるというか、やりきったというような気持ちで持てたらいいと思うのです。でも、実際は会場で展示された作品を見るたびにまだまだだなと思うことばかりです。エゴン・シーレの作品が好きなのですが、彼の描く人物からは見る側に迫ってくるものがあります。狂気を感じるくらいのものがあります。同じような描き方をしたいわけではないのですが、見た人に迫る人物像が描けたら最高だなと思います。なかなかそういうところまでは辿り着けないですね」

彫刻

# 横山丈樹

彫刻家  
日展会友

富山県南砺市井波、日本で多数の木彫刻の町である。「井波彫刻」、その起源は江戸時代中期にまで遡る。二〇一八年には「日本遺産」に認定された。まち全体が木彫美術館のような趣で百八十に上る彫刻師の工房が軒を並べる通りに横山丈樹さんの祖父、一夢さんの代から続く井波彫刻の工房がある。また、祖父と父の作品を展示した美術館も併設されている。三代目の丈樹さんは家業を継ぐ一方、伝統を踏まえながらも新たな表現の彫刻に取り組み、日展への出品を続けている。これまでの歩みを伺い、アトリエを取材させていただいた。



## Profile

Takeki Yokoyama

1972年、富山県井波町生まれ。1995年、第27回日展初入選。1996年、金沢美術工芸大学卒業。第26回日展初入選。1998年、富山大学大学院教育学研究科修了。2004年、第59回富山県美術展「遷」により、県展大賞受賞。第3回オーストラリア国際木彫刻シンポジウム招待「雲の住人」制作。2014年、第68回富山県美術展審査員。2015年、第45回日展展「John VI」により日彫賞。2017年、改組新第4回日展「双樹Ⅲ」により特選受賞。現在、日展会友、日本彫刻会会員、北陸日彫会会員、富山県彫刻家連盟会員、井波木彫刻工芸高等職業訓練校講師。

## 井波彫刻師から日展作家への歴史

「井波彫刻は、古くから社寺彫刻が活発ですが、それと並行して欄間、衝立、獅子頭等、生活の中に溶け込む伝統工芸品にも力を注いできました。現在井波で日展作家として活躍している方々の多くは、日々の生業の中で研鑽された井波彫刻の技術を用いて作家として活動されています。ゆえに多くの方々は日展作家であり井波彫刻師でもあるのです」

二百五十年の伝統を誇る井波彫刻が日展と関わったのは一九四〇年代頃のことである。井波彫刻師と富山県出身日展の漆芸家

山崎寛太郎氏との出会いが大きく関わっている。氏による展覧会出品のための指導により、井波彫刻師の技に意匠力が加わることになる。そして一九四一年に小さな町から一挙に五人が入選するという出来事が契機となり、日展作家を多く輩出していくことになる。横山さんの祖父、一夢さんもその一人である。

## 祖父も父も日展作家、井波彫刻の家の三代目に生まれて

「僕は井波彫刻の町に生まれ、身の回りに当たり前のように木彫刻がありました」。家業は欄間や獅子頭、天神様などを作るこ

刻の家を継ぐけれど、作家活動をするなら工芸ではなく彫刻という分野を選択したいと思い、進み始めました」

金沢美大に入学し、出会った先生も日展作家だった。写实的に人体のモデルを作る授業だったが、当時は自分が何をしたいかがわからず、ただ一所懸命、言われたようにモデルを見て作っていた。「なかなかいい作品になりませんでした、四年のときにその時の自分を出し切るつもりで取り組んだ作品が先生の目に留まり『ここまで作れたのなら、展覧会に出してみるか』と言われた作品が初入選しました」。後ろ手に

手を組んだ女性の立像である。こうして日展展と日展の二つをメインに出品するようになった。

しかし、抽象やデフォルメした彫刻を作る他団体の先輩から日展彫刻の一面的な部分しか見ずに否定的な意見を言われることがあった。「彼らが懐いている日展のイメージに対し、どうしたら日展の懐の広さを分かってもらえるのか。自分が何を表現したいのかまだはつきりしない未熟な私はなかなか言い返すことができませんでした」。だが自身の作品が目指す方向性のヒントにはこのとき出合っていた。

## 写実表現と抽象表現の融合。自分らしい表現をめざす

その後も、自身を彫刻家として育ててくれている日展に対して否定的な意見を言われた学生時代の出来事がずっと心に引っかかっていた。「言われっぱなしでよいのか？いいや、そうじゃない事を反論するんだ、自分の作品で」

最初は実力的にも思う作品を作れず、七八年はもがきながら作っていた。自作の中に少しスパイスを入れ始めたときに「何かを表現したいという気持ちは伝わってくる」と言ってくれる方がいた。「下手だけれど、その方向性は悪くない」という言葉がきっかけで、ずっと続けていけるテーマや自分らしい表現、どうしたら人に感動を与えられるのか繋がり始めました。写实的な表現と抽象的な表現の融合した作品、勉強を続けながら表現を半々でやっていけなにかと思いい、やっとそれが溶け合い始めてきました」

これまでに何度か木彫のシンポジウムに参加する機会も得た。二〇〇三年、四年に一度開催される井波木彫刻キャンプに井波美術協会代表として参加し、十日ほどで一気にも木彫作品を作った。二〇〇六年にオーストラリアのグロースシュノーで開催されたシンポジウムでは、チェーンソーを使って丸太を彫り大胆に早く作る海外のやり方を学



「双樹Ⅲ」2017年 改組 新 第4回日展



一方、金沢美大を卒業後は富山大学の大学院に行つて勉強を続けた。戻つて将来どうするかというときに、井波彫刻の職業訓練校に入つて職人の道に一から弟子入りするか、学校の先生になるか、講師をいくつか兼ねて生活するか、いくつかの選択肢があった。横山さんが選んだのは、井波彫刻を守ることだ。「富山県で僕より年下の日展の彫刻家は現在一人しかいないのです」。後進を育てていかなければと危機感を持っている。横山さんは現在、職業訓練校で彫塑を教えている。手やマスクを作る基礎的なこと、ものを見たまま作れるための目を養う過程を教える。「富山出身のお弟子さんはほとんどいません。日本全国から来てくれますが、五年間の修行の後ほとんどの方が地元に戻つていけます。それがまた問題で、ここに残つて井波彫刻師になつてくれれば、腕がついてきたら、展覧会で名をあげたいとか頑張ろうと思う人も出てくるかもしれないですが、帰つて行くのです。なので、今は町や井波彫刻協同組合ぐるみでなんとか定住しやすい町にしようと動いてくれています」

昔と違い欄間の需要も少なくなり、三年

作品。自然の力強い二本の樹木にたとえ、空間構成を意識した作品である。

#### 井波彫刻の歴史のなかでの挑戦

んだ。海外でのそうした経験は、外へ向ける目を育むことになる。

今はSNSで簡単に世界と繋がる事が出来る。「まだまだ若輩な自分ですがシンポジウムの繋がりから様々な国の作家と画像を通して刺激し合い、競い合っています。シンポジウム以外の活動を聞かれるとき自分はこう言います『日本の日展という公募展に作品を出品している』と」

#### ヨーロッパの旅をきっかけに、朽ちていくものを

横山さんが写真と抽象の融合した作品を作り出したきっかけは、大学院を卒業後に出かけたイタリアとギリシャの旅にある。現地でいろいろな美術館や遺跡を見たが、衝撃を受けたのはアクロポリスの丘に



「Fusion」2003年 第35回日展

行ったときのことだ。パルテノン神殿を訪れた時、そこら中に修復中の彫刻や、風化した大理石、剥がれた破片がごろごろころがっていた。バラバラになっていた、崩れていたり。だがそれらの破片一つひとつが凄いい光、パワーを発しているように感じた。粉々のもののさへも輝いて見えた。千年二千年という時空を超えたものが目の前に存在している。「その時間感覚に体が震えてきました。岩肌や年代を重ねて朽ちていったものが発する存在感と生命力。意識がカチツとはまって、やっと表現したいものが何かという答えがつかめた気がしたのです」

自分が受けた衝撃にも似た感動を作品で表現したい。朽ち行く物の中にある美しさ。年月が経ったからこそ形成された形に美を表現しよう。そう決めた。そこには表面上だけではなく精神性、内面性も必要だ。最近、人間が生まれたときから持っている原始的な感覚、自然に対する畏怖や美も表現したいと思っている。

旅から戻り、今まで目に見えていたのに目に留まらなかった素材をその時の感覚を思い出して選び、人体をモチーフにした塑像と組み合わせる。新たな創作活動が始まった。その後、富山県展や日彫展では自分の考える彫刻作品を出し始めたが、日展に出すには勇気がいった。

「日展は長い歴史と確固たる実績のある唯

先まで注文が埋まっているという事もない。家を建てたら獅子頭を贈るとか、玄関に置かれたの衝立やパネルを購入することも少なくなった。そうした時代だが、昔の良き時代を経験してない分、逆に現代にあまり悲壮感を感じていないと言う。「現代のニーズに合った井波彫刻の制作、今の時代なりの受注数で、初代や二代には及びませんが、自分のペースで井波彫刻に携わっています。初代が作つて二代が守つたものを私も守りながら発展させることが出来たらいいなと思いつながらここに在るわけです」

こうして横山さんは、伝統ある井波彫刻を生業としながら、塑像で写真と抽象表現の新たな融合を目指し、作家活動を続けている。

「昔から温故知新と言う言葉があります。井波彫刻もそうですが、昔のものを守る大



「瞑想」2013年 第45回日展

切さ、それと同時に現代に合わせた彫刻への取り組み。その先に発見と発展を見出すことが大切なことだと思ひます。三十年前と今は違う、もちろん普遍的なこともありますが、様々な価値観が変化しているのも事実です。

人の心を動かせる、時代に合った表現に挑戦したい。そのためにはやはりベースがとても大切で、井波彫刻なら伝統と技術力。彫刻も一緒で、基礎力、写真力があれば表現したい形も自由自在になる。もっと自由になるために伝統を学んでいます。ただそれが必要とされなければいけない。見る人の立場や気持ち、時代背景などいろいろなものを考えて、そこに自分の表現を込め、作品に取り組んでいきたいと思ひます」。伝統の町で、今日も横山さんの挑戦は続く。

一無二の団体です。その団体の先生方に『悩むより、やってみなさい』と言つてもらえた事はとても心強いものでした。『作れないから逃げているのではないか』『しっかり作れるようになってからのの方が良いのではないか』そういう意見も当然あります。ですが、何十年後かに作れるようになったその時、三、四十代の時の感覚で作品に取り組むことが出来るのだろうか。もちろん先の事は分かりません。基礎力が無いと作品に説得力を持たせられない。見せるべき場所、作り込むべき箇所が光るからこそ、その光が抽象的な表現箇所を照らし出してくれるのではないだろうか。虫のいい話ですが自分が出した答えは、写実的表現の研鑽と抽象的表現の模索、感性と技術、二つの両立、同時進行ということでした」

二〇〇三年、三十代前半で思い切つて日展に出した新たな作品が入選し、自信になった。その後、入選が続くなか、崩しの無い作品にも自分の世界観を出す方法として神代杉という素材を使用した。土の中に何千年も埋もれていた素材と作品を融合させることで自分の世界観を表現したのが二〇一三年の作品だ。さらに別の作品では使い古された枕木、何十年、風雪にさらされながら耐え忍んできた強さを持つ素材を三枚並べ、トルソーと融合させた。

二〇一七年、特選を受賞した「双樹Ⅲ」は男女の立像が岩の中に一体化したような

# 曾根洋司

陶芸家  
日展会員

日本有数の焼きものの町として知られる土岐市。遙か東に恵那山や屏風山を臨み、北部・南部・西部と山々に囲まれた美しい自然に恵まれた土地だ。土岐市周辺は古代から良質な陶土が産出し、須恵器が作られ、四百年前、安土桃山時代には茶人の好みを反映した芸術性の高い、黄瀬戸、志野、織部、瀬戸黒茶碗などが生み出された。この古い陶芸の歴史を持つ地に窯を構え制作を続ける曾根洋司さんを訪ねた。



## 窯元の二代目として

曾根洋司さんは土岐市に生まれ、現在も同地で日展や日本現代工芸美術展への出品と日常の器作りを続けている。「父の両親は農業を営んでいたのですが、父の強い思いで私が生まれる五年前に製陶業を始めました。今は窯の数も少なくなっています。いまですが、私が子どもだった頃はこのあたりも陶器の産地として賑わっていました。父は私を窯焼きの息子にしようと考えていたようで、中学校の頃には日展に連れていってもらったりしていました。あの頃はまさか自分がそういう作品を作って出品すると

は予想もしていなくて、ただ凄く展覧会があるんだなと思っていただけでした。当時はこのあたりも機械化を進めている頃でしたが、父は良い物を作りたいという感覚の人だったので、息子は芸大に入れて、手で轆轤がひけたり、デザインもできるようにしたかったようです」。普通科の高校に進学するとその後の進路も見据えてデッサンの教室に通うようになり、その教室の先生が日展の彫刻家・神戸峰男氏だった。「考えると日展にはなんらかの繋がりがあるんです。高校三年間は神戸先生にずっと習っていました。でも勉強が嫌いで、芸大は無理だという話になり、京都芸術短期大学（京都造形芸術大学の前身）に入りました。そこ

では小川欣二先生が教授をされていて、叶道夫先生も講師で教えておられました。同級生には男子が少なく、その半分は日展を目指して頑張っているような熱気のあるクラスでした。短大なので朝九時から一般教養があり、午後からは実技の授業です。まだ短大になってから三年くらいしか経っていない新しい学校で、夜はいつも九時くらいまでいて轆轤をひいたり、みんなで話をしたり。講師の先生が窯をたく時などは、深夜の十二時くらいまでいて、とても楽しかったです」。同じ日展を目指す仲間と切磋琢磨しながら充実した短大生活を終えると、曾根さんは実家の土岐に戻り家業を継ぐべく活動を始める。

## Profile

Yoji Sone

1960年、岐阜県生まれ。1983年から家業（製陶業）に従事。1984年、日本現代工芸美術展入選。1985年、日展入選。2000年、現代工芸美術家協会本会員、精治器研究会を立ち上げ代表者となる。2001年、日本現代工芸美術展本会員賞。2005年、同連田修吾郎賞。2007年、日展特選。2010年、日展東海展中日賞。2013年、美濃陶芸協会美濃陶芸大賞、日展特選、美濃陶芸協会理事となる。2017年、日展会員となる。

## 日展初入選の後の迷いの時期を経て

その頃から同級生たちが公募展などに出品し入選したといった話がちらほら聞こえてきて、ご自身もそろそろどこかに出品したいと思うようになっていく。そして二十三歳の時、初めて日展へと出品するがあえなく落選。そして翌年、二十四歳の時に再度挑戦し、見事に日展へと入選した。「初入選はとても嬉しかったのですが、それからが厳しかった。その後も毎年日展に

は出品していましたが、三十七歳になるまで四回しか入選できなかったのです。その頃はとにかくもがいていました。

地方で日展に落選すると、二回落ちたような感覚になります。日展は東京で秋に本展を開催し、こちらでは一月に巡回展が行われます。ですから十月に落選の報と、さらにまた一月に主催のひとつである中日新聞さんの日展の記事によってショックを受けるのです。でも若いからは頑張ろうという気持ちでひたすら制作を続けていました」

初入選の後、長らく迷いながらも己の作品を模索して制作を続けていた曾根さん。それが三十七歳以降、日展に毎年入選するようになった。それは何がきっかけだったのだろう。「作品に窓を開けたことが大きな転機になったと思っています。それ以前の作品はその背後の空間を完全に遮断した壁という感じのものでした。瀬戸の亀井勝先生は私の恩師で、長く作品を見ていただいてお世話になっているのですが、先生の作品には細かな格子のようなものが作られていたりします。向こう側への『透け』というか『抜け』というのか、ああこういうことだなと思って自分の作品に穴を開けてみたんです。壁の向こう側の光もこちらに持ってくることで、新しい空気の流れを感じてもらえるように考えました。言葉を換えれば、それは『間』を作ることだと思

います。そうしたら落選しなくなり、五年後に東日本大震災があつて、その五年後に特選を受賞することができました」。作品の中に窓という鑑賞者の目を惹きつける場所を作ることで無事に特選を受賞した曾根さんだが、その後、二回目の特選をとるにはまた六年の月日が必要だった。「一回目の特選をとった次の年は、何か全く違う作品を出品するほうが良いだろうということもあつて、できるだけこれまでのイメージとは異なる作品を作ろうとしたのですが、それは自分でもよくなかったと思います。変化を求められてもどうしたらいいのかわからなくなり、なんだか変なことになってしまつて……。それで結局、もどに戻したところようやく二回目の特選を受賞することができました。

二回目の特選をいただいた『雲涯ヨリ』は恵那山のイメージが入っています。犬の散歩をしていて、丘をちよつと上がったところから見渡すと、なぜか向こうの方まで同じ高さの土地が広がり、その先に屏風山があつてさらに恵那山が続いているのです。それをイメージしたものです。この作品は散々迷った後で何か気分を変えたかったのでしょう。こういう具体的な自然のイメージがもとなつていのはこのシリーズだけです。作品を作る上で自分らしいかそうではないかというのは大切なことだと考えていて、具体的な自然の風景をもとに

「雨あがり・・・V」 2018年 改組 新 第5回日展





してもへたるとか曲がることを避けられないのですが、なるべくそうならないように注意しています」

焼く時には日展などに出品する作品と食器類なども一緒に窯に入れるという。窯の中は三列になっていて、真ん中には直接は火が当たらない。そこに作品を置くそうだ。「形の変化もそうですが、釉薬に関しても、炎が当たってもあまり変化しないものを使っています。窯変によってイメージが狂うのはなるべく避けたいのです。それに一緒に窯に入ると、焼いた後にゆっくり冷めていくので、それも利点です」。作品作りと家業の窯焼きの仕事が両輪となつて、ともに良いものを生み出している。そういう仕事を曾根さんはなさっているのだと思う。

### T・KAMNAシリーズと 精炔器の復興を目指して

作品作りの一方で、父親から継いだ家業でも新しい試みをなさってきた曾根さん。日本の日用品として長く用いられてきた陶器が徐々に大量生産の器などにとって変わられていくなかで、四十歳の時に西部陶磁器工業組合の青年部の仲間と組合を作り、暖かみのあるクリーム色の色彩が魅力の半磁器「T・KAMNAシリーズ」を生み出し、ギフトショーに出品するよう

ません。仕事をしないと不安で、どうしても仕事をしてしまう。それこそ作品を展覧会に出して、東京でどんな顔をして並んでいるのかというのがすごく不安で、もう直しようがないのだけど、ああすれば良かった、こうすれば良かったとずっと考えます。それが作家というものかもしれません」

### イメージ通りの形を作り上げるために

様々な試行錯誤を繰り返しながら、日々、作品について考え、制作に取り組み続けている曾根さん。昨年の日展で発表された「雨あがり：V」は、作品を形作る緩やかなカーヴを持つラインと中央に垂直の線で切り取られた空間、その奥に微かな光のように縦に流れる曲線が全体で軽やかな動きを感じさせる。下方の深い黒い色面は上方に向かうにつれてニュアンスのあるグレーの色面へと変化し、所々青く水滴のようなドリッピングの跡がアクセントとして目を引く。「もとの土はマンガンや鉄を含む黒に近い茶色です。下方の黒は黒い釉薬をかけているわけではなく、緑色に発色する釉薬を使っている、その釉薬と素地が重なり漆黒に見えています。白い部分には透明釉をかけています。その透明釉と緑の釉薬が反応して青っぽく見えるような部分が生まれます。さらに青い釉薬をとどこころドリッピングして雨の滴のようなイメージを

な試みも行った。曾根さんは今も「T・KAMNAシリーズ」の制作を手がけ、

このシリーズはオンライン販売などで定番の人気商品となっている。また昭和初期に美濃地方で採れる黄土を活用しようと開発されたやきもの「精炔器」は良質な原料と高度な技術をもとに、新たな陶器として注目を浴び海外へも輸出されて人気を博した。しかし効率化と低価格化が求められる時代の風潮の中で昭和四十年には生産が途絶えてしまっていた。そんな「精炔器」が現代になって再び注目されるようになり、曾根さんは二〇〇〇年に「精炔器研究会」を発足し、現在まで各地でワークショップを開催するなどその質の良さを多くの人々に伝えるための取り組みを続けている。

### きちんとしたものを作り続けたい

作品の制作と食器類の制作、二つの両輪で日々忙しくされている曾根さん。最後に今後についてうかがった。「以前、亀井先生に自分は大きいだけ取り柄ですと話をさせていただいたところ、亀井先生からどのみち体力も気力も大きなものに対応できなくなる時がくる。だからできる限り大きな作品を作り続けていなさいと仰っていたんだんです。それからはどこまで出来るかわからないけれど、なるべく大きく、自分らしいものを、できるだけ長く続けられればと思っています。一生懸命ということが唯一の取り柄ですから、きちんとしたものをしっかり作っていききたいです」



「雲涯ヨリ」 2013年 第45回日展 特選



「新月 III」 2007年 第39回日展 特選

もたせています。中央の窓の奥に見えるS字のラインは自分の中では雷で、こちらは雨がやんだけれど向こう側には雨雲があつて雷が光り、まだ雨が降っているようなイメージを出したいと思っていました」

制作にあたってはスケッチをもとにマケットを作る。そのマケットから、実際の作品の大きさを計算し、型紙を作る。ヒモ作りで下方から粘土を積み上げていくが、その際に四センチほど積んでは型紙をあて、形に狂いがないかをチェックしながら成形していく。食器を作るための土は既収縮率が十一〜十二％ほどに調整されているという。これだと大きな作品を作る時には割れやすい。そのために混ぜ物をして収縮率を八％に抑えている。表面はホームセンターなどにあるのこぎりを使い、軽く削りながら傷をつけてマチエールを作っている。陶芸という素焼きと本焼きの二回ほど窯に入れることをイメージするが、曾根さんの場合は本焼きを二回。一ヶ月ほど乾燥させた後に、千二百三十度で締焼きをする。収縮率を抑えるためにまぜた道具土は吸収率が非常に高く、その土が釉薬を吸うためもう一度焼いても釉薬がつくそうだ。

「型紙がないとどんな形が元のイメージから外れていつてしまいます。だからその都度、型紙をあてながら微調整していきます。いずれにしても窯の中に一度は入れるので、自分の手から離れ、炎の影響でどう

書

# 植松龍祥

書家  
日展会員

山形県のほぼ中央に位置する東根市はさくらんぼの王様と言われる「佐藤錦」発祥の地。山形新幹線が停車するさくらんぼ東根駅から車で10分弱ほどのどかな住宅街にある書家・植松龍祥さんのお宅に伺った6月下旬はちょうどさくらんぼの最盛期で、お宅までの道すがらにも果樹園の木々のところどころから美しい紅色の果実が顔をのぞかせていた。



## Profile

Ryusho Uematsu

1964年、山形県東根市生まれ。1990年、大東文化大学大学院中国学博士前期課程修了。1983年、殿村藍田・植松弘祥に師事。1994年、謙慎書道会春興賞（1995年梅花賞）、読売書法展読売新聞社賞（2002年2回目）。2005年、日展特選（2009年2回目）。2016年、改組新第3回日展審査員。現在、日展会員、読売書法会常任理事、謙慎書道会常任理事、日本書道ユネスコ登録推進協議会賛同団体署名運動地域代表委員・山形県担当。

## 書よりもスポーツに 熱中した少年時代

父である日展の書家・植松弘祥氏とともに山形県東根市で制作や子どもから大人まで誰もが学べる書道団体・櫻墨書院で書の普及に励む植松さん。父である弘祥氏は東根の植松家に養子として迎えられ、もともとは牛の売買の仕事を営んでいた。その時に地元の青年団のような集まりで書道をたしなんだ。ある時、仕事で東京を訪れた際に見た殿村藍田氏の作品に強い衝撃を受け、飛び込みで殿村氏を訪ね、書の稽古が終わるまで片隅でじっとその様子を眺めて

いると、書への熱意が通じて入門を許された。そして現在の住まいに移る時には書家としての活動に専念していたそう。書家の父を持つ植松さんは、いつからご自分が筆を持っていたのか記憶が定かではないという。かなり幼い頃から書を書くということが、植松さんの中では日常のものとしてあったのだろう。そうした生まれながらに書道に触れ成長していった植松さんだが、中学校にあがるとスポーツに力を入れるようになる。「当時は書よりも体を動かしたくて、中学の頃には卓球に熱中していました。高校でもやはり体を動かすことを続けたかったので、山岳部に入りました。じつはその高校の書道の先生と父が昔から親し

## 殿村藍田氏への弟子入り

大学は日展にも数多く入選者を輩出し、青山杉雨氏が初代所長をつとめた書道研究

所（前・書道文化センター）もある大東文化大学へ進学した。山形から上京し東京での生活を送ることになるが、大学とは別に父親が師事した殿村藍田氏のところに通うようになった。

「殿村先生は当時すでに七十歳を過ぎておられて、ほとんど新しいお弟子さんをとられていませんでした。もちろん厳しい先生ではありましたが、下町育ちでざっくばらんなところもあり、また私が孫のような世代ということもあってか、夕飯をご一緒させていただいたり、ずいぶんお世話になりました。私は大学の授業もあるのでお弟子さんたちが帰られた後、夕方に伺って稽古をしていただきました。一対一で教えを受けていたので、ずいぶん貴重なお話もしていただきました。殿村先生はほとんどお手本を書かれません。お手本を見て書いてばかりだと、師匠が亡くなると書けなくなっ

てしまう、それはダメだと仰っていましたから。手本ではなく、自分の理論を真似るようにとよく言われていました。当時の先生のお言葉は深く心に残っています」

昭和を代表する書家の一人・殿村藍田氏は家業の建築の仕事を継ぐことをせず、実家を勘当されてまで書を極めることを目指した。豊道春海氏に弟子入りした時には実家の援助もなく、稽古に行く前に公園の水を飲んで空腹を凌いだこともあったそう。書の道にかける並々な情熱を持ち、まさに心血を注いでその道を究めた殿村氏に弟子入りした植松さん。その思いに直に触れることができたことは非常に大きなことだっただろう。「その当時は他にも個性の強い巨匠がおられ、中でも殿村先生は特に反骨精神のようなものがありました。日展の搬入にあたってはギリギリまで書いておられて、それだけ自分に厳しい先生でし

かったこともあり、入学したての頃に先生に呼ばれて書道部の部室につれていかれて、あたかも入部するように紹介されてしまったんです。でも自分としては書道部に入るつもりはなかったのですがその後は行かず山登りです。でも二年生になる頃には将来のことを考えるようになって、その時に自分にはやはり書道しかないと思うようになり、改めて書道部に入れていただくようお願いしました」

私は知識もほとんどなく、余計な勉強もせずにお伺いしていたので、そこでの書の勉強はすべてが新鮮でした。時にはうかがうことに二の足を踏むこともありましたが、でもある意味とても楽しかったです。殿村先生は草書や行書はうねったり大きくなったり、自由に書かないとつまらないだろうという理論で、でも人間の骨と一絡で曲がついてもしつかりと強弱をつければバランスは取れて倒れないというお話をされていました。その頃はおそらく実感はできていなかったのですが、自分がこうして長く書き続けていると、確かにそうだと考えるようになりました。

殿村先生が亡くなられてから、今でも作品を書いていると、こういうものを書いたら先生に怒られるかなと思ったりします。やはりとても大きな存在です」

## 日展は簡単な気持ちで 出すところではない

そうした中で大学、そして大学院へ進学した植松さん。大学四年間に日展へ出品することはなかった。「先生は、日展は簡単な気持ちで出すところではないとはっきり仰っていました。ですから私も先生のお許しが出るまでは自分から日展に出したいとは言いませんでした。そして大学院の最後の頃に先生から出品を試みたらどうかと

「李太白詩」 2018年 改組 新 第5回日展





「崔禮山詩」 2009年 第41回日展 特選



るので、その頃の詩をよく用いています。詩というどうしても唐詩というイメージがあり、比べてみると唐詩のほうが字は落ち着いていて整っています」

#### 子どもたちに伝えたい書の魅力

現在、植松さんはご自宅で生徒さんたちに書を教えることに加え、声がかれば地元为学校などにも出向き子どもたちに書の指導も行っている。「今はせわしなく、なんでもできる世の中ですが、だからこそ書道の魅力をもっと伝えていかなければならないのではないですか。学校で書の授業はあっても、DVDを流すだけで、実際に生徒たちの目の前で筆を持って教える先生方も少なくなっていました。生徒たちの名前のお手本ひとつとっても筆ではなくて、よくてパソコン、悪いと鉛筆で書

かれたものといったこともあります。でも筆でお手本を書いてあげると、みんなキラキラと目を光らせてかっこいいと言うわけです。知らないというのはある意味不幸なこと、少しでも筆文字の良さを伝えられればと思います。うまくなくてもいい気持ちもありますが、筆で書く楽しさというようなものもあるんだと伝えられたらいいですね。

子どもたちに教えている時に、例えばはらいの線が少し長くなってしまったとか、ちよつと間が空きすぎてしまったとか、そういうところを逆に子どもたちは真似します。彼らはある意味、純粹なので、ごまかすことができます。そういう子どもたちに本当の文字はこうやって書いていたんだよ、こういう形なんだよということを教えてあげると、もつと字への理解が深まり、言葉を大事にするようになるのではないのでしょうか。今、外国人を呼んで日本の文化



「何稚孝詩」 2005年 第37回日展 特選

いうお話をいただいて出すようになったのです。でももちろんすぐに入選することはできず、初入選したのは山形に戻ってきてから、二十九歳の時でした」。その時のことを植松さんはあまり覚えていないと言う。「もちろん嬉しいという気持ちはありました。父の頃も日展に入選することは本当たたいへんで、私が小学生の頃などには日展の時期になると父は非常に厳しい顔で制作を行っていました。そして入選の連絡が入るとお弟子さんたちもたいへん喜んでいました。それに殿村先生も日展の出品作に対して、一切、手抜きがありませんでした。そうしたことを間近に目にしている、日展というのが本当に凄ところだということが逆に身に染みつきすぎていたのかもしれない。初入選の時も入選で終わらずに次へ次へという気持ちを持っていたような気がします。それは今でもそうですね。日展にはやはり妙な緊張感があります。新聞社

が主催している書の展覧会で中心になっておられるような先生方も、日展には落選してしまうような世界ですから。父のお弟子さんたちの中には入選はできないけれど毎年かならず出品されている方も沢山おられます。日展という厳しい世界にチャレンジしている、そのこと自体がモチベーションになる。それが日展の魅力のひとつだと言えるでしょうね」

#### 書で自分自身を表現する

書の場合、自分で詩を作ってそれを書くケースと、古典の詩を使用する場合とがあるが、植松さんは後者が多いという。「私は詩の内容を書くのではないと考えています。詩自体の内容の良し悪しというよりも、書いてみて自分が表現しやすい、構成しやすいものを選びます。日展は秋の展覧会なので、秋の詩が良いかなといったことは考

えますが、だからといって感情移入するわけではありません。今回はこういう構成にしたいと考えて、詩の字面などを見ていて、ここにはこういう字は来ないほうがいいとか、出だしはどうだろう、あまり同じような形の字は並ばないほうがいいだろうといった選び方です。

公募展という勝負の場になった時に、詩の意味を無視はしませんが、意味を書いているわけではなくて、極端に言えば詩の意味は関係なく、あくまで詩を借りて書いているという感覚です。

大学の頃は殿村先生もお使いになっていた中国の『玉台新詠』から選んで書いていました。それから『唐詩三百首』などよく知られているものを使っていたのですが、何年もやっているのだんだんとネタも尽きてきて、あまりにも有名なものだとちよつと物足りないような気がして、今は自分の書く字に明代・清代に近いものを求めている

を紹介しようというインバウンドの動きが盛んですが、そういう時に体験できる日本の文化としてはお茶やお花、書道があります。そのわりに書道などは学校の授業でも書の時間はほとんど減らされて、それはちよつと違うのではないかと思います。

高校でも教えたことがあります、あまり興味がない様子で授業を受けている生徒たちも、いざ書くという時になるとその一枚を書いている間は黙って集中しているのです。そしてその書いた字を見てそこから何かを感じる。自分の字ですから自分を見るみたいなものですよね。やはりそういう瞬間は大事です。文字を書く時間、一瞬でもしんと集中する。特に今の子どもたちには大事な時間なのではないかと思っています」

展覧会概要

2019年秋の日展は下記の日程で開催いたします。日本画 ・ 洋画 ・ 彫刻 ・ 工芸美術 ・ 書の5部門にわたり、全国から応募され、入選された作品と日展会員などの作品を一堂に展示いたします。日展をさらに楽しんでいただくためにさまざまなイベントも開催いたします。

展覧会名	改組 新 第6回 日本美術展覧会	
英 文 名	The 6th Reorganized New NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition	
会 期	2019年11月1日(金)～11月24日(日) 毎週火曜日休館 (観覧時間) 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで) ※11月15日(金)は「日展の日」として、入場無料となります。	
会 場	国立新美術館 東京都港区六本木7-22-2 東京メトロ千代田線乃木坂駅直結 都営大江戸線 六本木駅7出口徒歩約4分 東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口徒歩約5分	
主 催	公益社団法人日展	
後 援	文化庁／東京都	
入 場 料	一般	高・大学生
当日券	1,300円	800円
前売券・団体券	1,100円	600円

- ・ 小・中学生は無料。団体券は20名以上。20枚購入につき招待券を1枚進呈。
- ・ 前売券は、チケットぴあ、ローソンチケット、ファミリーマート店内Famiポート、CNプレイガイドほか主要プレイガイド、デパート友の会、画廊、画材店などで発売。(前売券販売期間:9月1日～10月31日)
- ・ 日展ウェブサイトからもご購入いただけます。



ポスター

★ お得なチケット ★

ペアチケット (前売りコンピューターチケットのみ)	1枚2,000円。お二人で入場の方、またはお一人で会期中 2回入場 いただく方に、お得なチケットです。他の割引との併用はできません。 (販売期間は前売券と同じ)
トワイライトチケット (時間限定入場券・会場窓口販売)	観覧時間：午後4時～午後6時 入場料：一般 400円/高・大学生 300円

- ・ チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展ウェブサイト」<https://nitten.or.jp/> でご確認ください。

報道関係お問い合わせ

報道関係のお問い合わせ、ご取材、写真申し込みなどは下記までお願いいたします。  
日展広報事務局 安田、松井  
TEL 03-6312-4098 FAX 03-6862-6727 MAIL [sr@mbr.nifty.com](mailto:sr@mbr.nifty.com)  
〒107-0062東京都港区南青山2-18-20 南青山コンパウンド502

イベント概要

芸術の秋を楽しんでいただく多彩なイベントを開催！

講堂でのイベント						場所：国立新美術館 3階 講堂（入場無料） ※変更となる場合があります。					
開催日		時間 ※途中10分休憩	講演会・シンポジウム・映像による作品解説等				司会（進行）				
11/2（土）		午後1:30～3:30	（日本画）	映像による作品解説「自作を語る」 今年度審査員と新入選者による座談会		今年度受賞者（大臣賞・都知事賞・会員賞・特選） 今年度審査員 今年度新入選者					
11/4 （月・振）		午後1:30～3:30	（洋画）	今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会				町田博文 大友義博			
11/8（金）		午後1:00～2:30	（特別 講演会）	「美の心 茶の心」茶道裏千家 15代・前家元 千 玄室 氏（大宗匠）		※整理券を配布します					
11/9（土）		午後1:30～3:30	（彫刻）	シンポジウムによる討論会「彫刻を語る」  映像による作品解説「彫刻」		工藤 潔 早川高師 岡本和弘 安田陽子 境野里香 加山総子 竹谷邦夫 徳安和博 阿部鉄太郎		櫻井真理			
11/16 （土）		午後1:30～3:30	（工芸 美術）	今年度審査員と受賞者による座談会		今年度審査員 今年度受賞者					
11/23 （土・祝）		午後1:30～3:30	（書）	シンポジウムによる討論会「日展の書」 映像による作品解説「書」		西村東軒 佐々木宏遠 吉川美恵子 和中簡堂 吉澤鐵之 田頭一舟 岡野楠亭		土橋靖子			

わくわくワークショップ

親子で記憶に残る体験をしてみませんか？

実施日程	時間	部門(希望する部門を選択)		
11/3(日)	午前 10:30 ～	日本画	洋画	書
	午後 2:00 ～	彫刻	工芸美術	
11/10(日)	午前 10:30 ～	日本画	洋画	書
	午後 2:00 ～	彫刻	工芸美術	
11/17(日)	午前 10:30 ～	日本画	洋画	書
	午後 2:00 ～	彫刻	工芸美術	

※各回約2時間

らくらく鑑賞会

出品作家達とゆっくり日展を鑑賞したい方に

- ◆開催日程：11/6(水)・11(月)・18(月)
- ◆定員：各回10～15名
- ◆参加費：1名5,500円(入場料、昼食、テキスト他)
- ◆時間：10:30集合、16:10解散(昼食つき)
- 予約制(詳細は下記日展事務局までお問い合わせください。)

グループ作品解説

平日(月～金)に15名前後の団体に  
作品解説をご希望の方に

- ◆日展作家が会場をご案内いたします。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書のいずれか1部門をお選びいただき、約1時間で主要作品をご説明いたします。ご希望のグループは、事前にご予約ください。
- ◆校外学習やクラブ活動など、学校のグループにも学年や目的に応じた解説をいたしますので、ご相談ください。

- ◆日展作家が直接指導します。
- ◆対象：小・中学生とその保護者  
(参加費は無料、保護者は入場券を各自ご用意ください。)
- ◆場所：国立新美術館3階講堂
- ◆申込受付：ハガキかFAX、又はメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・学年・人数・希望日・希望部門(※第2希望まで)を明記のうえ、下記までお申し込みください。申し込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。(受付締切 10/25必着)
- ◆受付人数：各部門10組(20名程度)
- [お申し込み・お問い合わせ]〒110-0002 東京都台東区上野桜木2-4-1 日展事務局・わくわくワークショップ係  
※各回約2時間 TEL.03-3823-5701 FAX.03-3823-0453  
E-mail [event@nitten.or.jp](mailto:event@nitten.or.jp)

ミニ解説会 会期中の平日開催

一人からでも解説が受けられる

- ◆開催日程：改組 新 第6回日展会期中の平日 (土・日・祝日・初日・11/15を除く) 午後1時30分～(30分程度)
- ◆定員：各部門20名(5部門) 参加費無料 各自入場券をご用意ください。予約制(当日受付あり)

「触れる鑑賞」プロジェクト

日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品(彫刻一部の作品)に触れて鑑賞していただける取り組みを始めました。

イベント予約 お申し込み・お問合せ

〒110-0002 東京都台東区上野桜木2-4-1  
日展事務局・展覧会係(TEL.03-3823-5701)